

---

# 過負荷な少年少女

kintoki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過負荷な少年少女

### 【Nコード】

N5418S

### 【作者名】

k i n t o k i

### 【あらすじ】

少年はある日突然、転生というものを体験した。強い体などなく、強力な超能力などもなく、ただ、共に生きてきた力のみを携えて。少女はある日突然、一人の少年に出会った。自分を否定する事もなく、縛り付ける事もなく、ただ、自分を肯定してくれる少年に。これは、そんな少年と少女の物語。

## 彼にとってのプロローグ（前書き）

はじめまして、k i n t o k i です。

小説を書くのは初めてなので、拙いところもあるかもしれませんが、どうか温かい目で見守ってください。

## 彼にとってのプロローグ

転生。良く二次創作などにあることだ。

ある日、事故か何かで死んだ 神様が現れた 死んだのは神様のミスでした お詫びとして力をくれてやろう さて、原作ブレイクの始まりだぜ！！ というやつだ。

が、彼の場合、いくつか違う部分があった。

まず、彼は神様になど会っていない。死んで、気がついたら赤子になっていた。

次に、別に事故にあったというわけではない。転生する前の事は良く覚えていた。普段となんら変わらない生活を送り、眠った途端、現在の状況に至ったのだ。

以上の事から分かるように、彼の転生は普通の転生とは大分違う。

当然、「So, as i play……」やら、「その幻想をぶち壊す！！」などといった力は持っていない。……否、一つだけ、前の人生において辛いときも哀しいときも嬉しいときも悔しいときも殺意を覚えたときも楽しいときも食事をするときも散歩をするときも眠るときも息をするときも、常に彼と共にあった力が、今の彼にもある。

そして、その力を前世であった小さな医師は、こう呼んでいた。

『<sup>マイナス</sup>過負荷』と。

とある町の幼稚園。その教室に、彼はいた。

「幸せは、歩いてこない。だからあるいてゆくんだね……いい歌だと思わない？」

ニコリと、周りに花すら見えそうな笑みを浮かべ、彼は問いかけた。

「幸せは待つてればくるものじゃない。自分から掴み取りに行かなくてはいけない。きつとこの歌はそういうことを意味してるんだろ  
うね」

まだ幼稚園生であるため背は小さく、髪は日本人らしく黒、顔は少し大きめの目に、優しい笑みを浮かべており、10人が10人、彼を無害な少年だと判断するだろう。

「今のこの状況だってそうさ。僕が幸せを求めて、自らの力で探した結果、こうなったんだ。やっぱり、この歌はいい歌だよ。うん」

事実、今彼が話しかけている少年も、そう思っていた。……その認識が、大きな間違いだったとも気付かずに。

「……ん？　ねえ、君。話聞してる？」

「！？ き、きいてる！ 聞いてるよ！！」

「へえ、じゃあ、僕が今何を言ったか、一字一句逃さず言ってみなよ」

「え、あ、えっと、……」

彼は相変わらず、優しい笑みを浮かべながら、椅子から立ち上がった。ゆっくりと歩み寄る。その後ろで、椅子が音を立てて崩れ落ちた。その光景に、少年は小さく悲鳴を上げた。その悲鳴に、彼は益々笑みを濃くした。

「ねえ、僕さ、思うんだよ。嘘はついていい嘘と、ついちゃいけない嘘があるって。で、今、僕は君の嘘で非常に傷付いてしまいました。さて、君の嘘はついていい嘘だったのかな？」

「つ、ついちゃいけない嘘です……」

「だよねえ。じゃあ、何で君はそんな嘘をついたんだい？」

「そ、それは……えっと、その……」

「早く言えよ」

「ヒッ！！」

冷たい、氷のような声に、少年は悲鳴を上げた。声は冷たいのに、表情は変わらないというのが、更に少年に恐怖を与えていた。

「こ、こわ、怖かったからです！ 怖くて、怖くて、う、嘘ついたら、み、みんなと同じ目に、あうとお、思っ……」

「……そうか。良く言えたね。でも……」

ポン、と、少年の頭に手を置く。その瞬間、少年の顔色は青を通り越して真っ白になる。

「でも、さ。君、怖いって言われた人の気持ち、考えた事ってある

？ 辛いんだよ、そうやって人に思われるの。ねえ、こういうときに、僕はついていい嘘が必要だと思うんだ」

「ご、ごめんなさ……」

「いやいや、謝る必要は無いよ。ほら、良く言うだろ？

罪には罰を、ってさ。だから、ね」

手を通して伝わる震えに、少年の化け物を見るような表情に、彼は歡喜の笑みを浮かべ、

「……もう、壊れちゃえよ。僕の『壊れた壊し屋<sup>デストロイア</sup>』で」



数分後、幼稚園から出てきた少年は、相変わらずその笑みを崩さぬまま、校門を出る。そして、廃墟同然となつた幼稚園を、指で作つた長方形で見て、

「……45点。何か、壊しすぎたって感じだな」

初めて、不満を露わにした。唇を尖らせ、目を苛立ちで細める。が、すぐに表情を元に戻し、

「さて、反省はこのくらいにして、と。そろそろ行こうかな？」

踵を返して、その場を後にした。

「次は、何を壊そうかな？」

その目にまだ見ぬ標的への期待を宿して。

次の日のニュースで、とある幼稚園が一日で廃墟と化した。というニュースが報道された。内部にいた職員、生徒は外傷はないものの

精神に多大なダメージを負っており、回復は絶望的だという。  
その中に一人だけ、行方の知らない生徒がいたらしいが、奇妙な事にその生徒の情報がその町の何処にも存在しないらしい。まるで、その少年の情報のみ、破壊されたかのように。  
今も警察は、その少年の情報、行方を追っているという。

## 彼にとってのプロローグ（後書き）

とりあえずプロローグ1つて感じます。

次回はプロローグ2にあたる、彼女にとってのプロローグを投稿します。

## 彼女にとってのプロローグ（前書き）

間髪いれずに第2話投稿。なのは登場&性格改変の回。

## 彼女にとってのプロローグ

少女はいつも独りだった。

家族は、忙しい母親に、母親を手伝う姉、鬼気迫る表情で稽古に励む兄、そして、ボロボロになって動かない父親。本来なら友達の一人や二人いるのだろうが、本人自身の積極性が低く、内向的というのもあり、友達は出来なかった。

だから、彼女はいつも独りきりだ。独りで、日常を過ごす。

『なのははいい子だから、我慢できるよね』

母親の期待を裏切らぬために、自分の思いを押し殺して。

夕日が沈みかけ、友達の家から帰る子供達がちらほらと見える。中には親に迎えに来てもらっている子もいて、誰もが笑顔を浮かべている。その光景を見ると、高町なのはは自分の中の何かが、黒い何かがこみ上げてきそうになり、見ないように膝を抱え、俯いた。

「あつれ〜？ こんな時間に子供が一人。いや、独りか。何してん

の？」

突然、なのはに声がかかった。顔を上げると、優しそうな笑みを浮かべた、自分と同じくらいの歳の少年が一人、自分を見下ろしていた。ここら辺では見かけない顔だ。そう思いながら、なのはは再び俯く。

「……遊んでるの」

「遊んでる？ その君の膝にも届いていないような砂の山で？」

コクリ、と頷く。少年は小さく溜息を吐き、

「嘘つけ」

その砂山を、蹴り飛ばした。崩れていく砂山を、ただ呆然となのはは見つめていた。暫くしてから、顔を上げて、少年を見る。少年は相変わらず自分を見下ろし……否、見下している。

「知ってる？ ホントに遊んでる奴はそんな見えて吐き気のする顔はしないし、ついでに遊んでたもん壊されたら凄い怒るもんだよ？ 特に、君は子供なんだし、もうちょい感情を表に出していいと思うよ？」

言ってる事の半分近くは理解できなかったが、最後の部分は少しだけ理解できた。

理解して 怒りが込み上げてきた。何も知らないくせに。突然出てきて、好き勝手言っつて。許せない。許せない。許さない。止まらない怒り。そして、

「わたしだって……ほんとに独りぼっちなんていや!!」

その感情を、爆発させた。立ち上がり、その瞳に憤怒を宿して、少年を攻め立てる。

「本当はみんなと遊びたい!! お母さんと遊びたい!! お姉ちゃんとお兄ちゃんと、いっぱい、いっぱい!!」

一度爆発させた感情は止まらない。目の前の少年に向けて、ただづつける。

「けど、だめなの!! なのはいいこじゃなきゃだめなの!! わがまま言わない、いい子じゃなきゃだめなの!! なのに、なのに、何も知らないくせに、好き勝手言わないでよ!!」

荒い息を吐いて、目の前の少年を睨みつけるのは。少年は笑みを崩して驚き、だが、すぐに表情を元に 否、ニヤリと、悪魔の様な笑みを浮かべて、言う。



「なんで、いい子でいたいのさ？」

世界が、静まり返ったような感覚を、なのは覚えた。

「えっ……？」

「だから、なんでいい子でいたいの？ 本当は、遊びたいんだろ？  
なら、遊べばいいじゃん」

「け、けど、なのはがわがまま言ったらお母さんが……」

「そんな奴、どうでもいいじゃん。それって、自分の気持ちを押し  
殺すほどに重要なの？」

その言葉を、拒絶できない。きっと、拒絶しなければいけないのに、  
拒絶するという事を忘れてしまっているかのように、その言葉が、  
耳に、心に、響いていく。

「感情を表すって事は、感情を持つ生物全てに許された特権だよ？  
それを、君の親は、姉は、兄は、自分の都合でそれを封じ込めて  
いる。……君はそれでいいの？ 自分の心を否定して、無理矢理抑  
えている奴等が、憎いと思わないの？」

「わ、わたしは……」

何かが、胸の奥からこみ上げてくる。黒く、どろどろとしたなにか  
が。冷たい、刃物の様な何かが。

「ほら、言ってみな。自分の心の奥にある思いを。君が理性なんて  
つまらないもので押さえつけていた、その思いを」

最後にニコリと、あの優しい笑みを浮かべた。その笑みを見た瞬間

なのはの中で、何かが崩れた。

[illegible]

ぽろぽろと、涙が落ちていく。自分だけが許されない、という理不尽が、憎くてたまらなかった。そんな、嗚咽を漏らすのはを、少年は、ゆっくりと包みこんだ。ぴたりと、止む涙。ゆっくりと顔を上げると、そこにはやはり、優しい笑みを浮かべる少年がいた。

「……やっぱり、君には素質があつたみたいだね。それが、母親の言葉という楔くわによつて、無理矢理普通イマルにされてたみたいだけ。ほら、みてごらん?」

少年がある方向を指差した。その方向を見ると、二匹の野良猫が、憎悪をぶつけ合っていた。思わず退いてしまひそうになるが、少年が力を籠めて抱きしめる事で、とめた。

「怖がる事はないよ。あれが、君の力さ」

「私……の？」

「そう。君の力だ。自らの感情を表に出し、相手の感情すらも爆発させる。君の、君だけの、おぞましくて、素晴らしい力さ」

耳元でささやかれる言葉。その言葉に抗えない、抗う気すら起きない。が、すぐに抗う必要がない事に気付いた。

今、高町なのは肯定されているのだ。親に、兄弟に、全てに否定されていた自らの全てを、目の前の少年に肯定されている。再び、涙が溢れてくる。さっきまでの憎悪の涙とは違う、歓喜の涙が。

「……あなたは、私を受け入れてくれるの？ 迷惑かけるかもしれない、いい子じゃない私を？」

「もちろん。むしろ大歓迎さ」

それが、限界だった。なのはは少年の背に手を回して、強く抱きしめる。それに合わせて少年の手の手も強くなり、益々歓喜が満ちていく。

「……あつ、そういえば、自己紹介がまだだったね。君のお名前は？」

「なのは。高町なのはだよ。なのはってよんで。それで、あなたのお名前は？」

ずっと少年の胸に顔を埋めていたなのはが、顔を上げる。少年は相変わらぬ優しい笑みを浮かべ、自らの名を告げた。

「破<sup>はのみや</sup>乃宮

凶<sup>まがつ</sup>。

呼びにくかったらまーくんでもいいよ  
「よ

## 彼女にとってのプロローグ（後書き）

やっちゃった感じがしないでもないです。

とまあ、なのは過負荷化です。能力の詳細については、その内に。

## 少年と少女の朝（前書き）

今更ですけど、作者の原作知識は殆どろ覚えです。

## 少年と少女の朝

携帯電話から響く電子音が、彼女を夢の世界から引き起こした。未だはつきりしない視界。それを目を掻いて無理矢理矯正する。そのままベッドの下に落ちていた携帯電話を拾い、アラームを停止した。

「……あれ、メールだ」

画面を閉じようとして、『新着メール一件』の文字に気付く。とりあえず決定を押して開き、差出人の名前を見る。

『まーくん』

「!?!? ま、ままままま、まーくんからのメール!?!」

そのまーくんの文字を見た途端、なのはの頭は急激に覚醒した。その勢いのままクローゼットを開き、制服を取り出す。そして、普段の運動音痴振りが信じられないほどの速度で着替えを終える。この間、約5秒。

「つ、ついに、ついに!?!?! まーくんからのメールが1000件目に突入したの!?! な、何を書いてあるんだろう? やっぱ朝の挨拶らしくおはよう? それとも意表を突いてのお休み? そ、それとも、な、なのはちゃん、愛してるよとか……きゃあああああああ!?! まーくんっただいたくん!?! でもそんなところが大好き!?!」

携帯電話を抱きしめながらベッドでごろごろと悶えるなのは。当然、

その行動によって髪は乱れ、服はしわだらけになっていくが、そんなものを気にする余裕は、今の彼女には無い。暫くして、荒い息を吐いてはいるものの、何とか平常心を取り戻したなのは、震える指を決定ボタンに近づけていく。

「はあ、はあ、はあ、はあ……さあ、教えて私のケータイ!!」  
1  
000回目のまーくんの言葉を!!」

そして、決定ボタンを勢い良く、押した。

『昨日の夜食のラーメンが、醤油だと思ったら味噌だった。死にたい』



「まさかのどうでもいい事だった！！　けど、そんなまーくんも大好き！！」

なのはの咆哮に、お隣さんがまたか、と呟き、溜息を吐いた。

家族への挨拶もそこそこに、なのはは家を飛び出した。視界の横で母親の寂しそうな顔が見えた気がしたが、些細な事だった。ハイテンション状態になってしているなのはを止められる人物など、この世には一人しかいない。

お気に入りの歌を口ずさみながら、足取り軽く歩くのは。が、そんななのはの気分を害するものが一つ。

「おつと!!」

「きゃっ!」

十字路から突然、自転車が飛び出してきた。自転車のタイミングが速く衝突はしなかったものの、突然の出来事に驚いたのは、後ろに倒れて尻餅をついてしまった。

「やつべえ。大丈夫? けど、ちゃんと左右見なかった君も悪いから、お相子だよね?」

見るからに軽そうな男が、自転車から降りてきた。その男を睨みつけるなのは。その目に苛立つたらしく、男は顔を不愉快そうに歪め、なのはに近付いていく。

「おいガキ、何だよその目。態々謝ってやってんのに、その目はないんじゃないの?」

「……」

「てめえ……いい加減にしろよ」

睨みつけるのをやめないなのはの襟首を掴もうとし、

「……なに、勝手に触ろうとしてるの？」

その、冷たい声に、手を止めた。  
体が震え、冷や汗が流れる。体中に鳥肌が立ち、その余りの何かに意識が飛びそうになる。

「私ね、嫌いなものが三つあるの」

スクリと、なのはが立ち上がる。それに合わせて、男が一步退いた。

「一つは、まーくん以外の人類」

なのはが一步、歩み寄る。それに合わせて、男が一步退いた。

「もう一つは、まーくん以外に触れられる事」

なのはがまた一步、歩み寄る。それに合わせて、男がまた一步退いた。

「最後の一つ。これが一番重要なの」

なのはが更に一步、歩み寄る。男は更に一步下がり、後ろにあった自転車にぶつかり、転んだ。

「最後の一つは、まーくんで幸せになれた後に、不快な気分になる事。前の二つはギリギリ許せるけど、これは駄目。許せない」

一步步み寄り、なのはは男を見下した。その冷たい視線に、震えが大きくなる。冷や汗が止まらない。そして、ようやく男は理解した。自分が今、感じている感情を。

(……こ、怖い……！)

恐怖。それが男の感じている感情だった。なのはから伝わる憤怒が、男の恐怖を倍増させている。ありえない、と思った。二十歳を超えている自分が、こんな小学生の少女に対し、恐怖しているなど。だが、そう思えば思うほど、恐怖は増し、伝わる憤怒も強くなっていく。

「だから、ね」

なのはが、ゆっくりと男に手を近づける。逃げようとしても、恐怖で体が凍りついたように、動かない。動けない。

「あなた、さつさと死」

「落ち着きたまえ」

「凄く興奮した……！」

突如、なのはが目の前から消えた。と同時に、さつきまで抱いていた恐怖が霧散し、男はその場に崩れ落ちた。

「な、なんだったんだよ、あいつ……に、人間じゃねえよ」

「うわっ、ひどいこというな、お兄さん」

「……！」

後ろから、声が聞こえた。驚き、その場から急いで立ち上がると、そこには少年が一人、なのはに抱きつかれながら立っていた。白い制服を着た、優しそうな笑みを浮かべた、人畜無害を絵に書いたような少年。一瞬安堵したが、すぐに男は気付いた。

目の前の少年も、また異常だと。

「お、お前等何なんだよ!？」

「何なんだよ、って言われても。私立聖祥大付属小学校3年1組所属の、破乃宮 凶としか言いようが無いんだけどなあ」

「同じく私立聖祥大以下同文付属の高町なのはです!! 好きなものはまーくんとまーくんとまーくんと以下同文!!」

「うわっ、なにその自己紹介。引くわー!!」

「そんな反応するまーくんも大好き!!」

腕の力を籠めるなのは。それに何事も無かったかのような顔をしながら、凶は男に近付く。無論、なのはを引き摺って。

「ねえ、お兄さん。僕思うんだよ。確かに、左右確認っていう一般常識を無視したなのはちゃんが悪いと思うけど、けど、止まらなかったお兄さんにも非があるし、そもそも止まらなかったのに左右確認なんか出来るわけないから、お兄さんも左右確認してないよね。

なのに、なのはちゃんだけを責めるのはお門違いって奴だと思うんだ」

「あ、うあ……」

「それに、ほら。そこに自転車停止の標識だつてあるわけだし、そう考えるとなのはちゃんは何一つ悪くないよね? ね、そう思うでしょ? 少なくとも僕はそう思うよ」

表情はそのままに、男を追い詰めていく凶。なのはも凶の首に手を回しながら同意している。

「ということほ、だよ? これはお兄さんが悪いのに、それを無理矢理両成敗にしようとした。これって、絶対に悪い事だと思うんだよ。これはそう簡単に許されていいことじゃないよね」

「……！　ゆ、許して……」

「許して欲しい？　いい年した大人が、こんな小さな子供に論破されて、威圧されて、その事に悔しいとも思わずに、許して欲しいの？　うわっ、なっさけねー」

「なっさけねー」

凶の言葉の後に続けるなのは。その言葉に、さっきまで収まっていた恐怖が更に大きくなって蘇る。

「た、頼む……！　許してくれ！　俺に出来る事なら何でもするから……！　だから、お願いします……！」

「……ふーん。じゃあ、一つお願い、聞いてくれる？」

一度なのはを離し……中々離れないのはを渾身の力を籠めて離し、男の自転車を持ち上げる。そして、自転車を指差す。

「コレに乗って、あっちの大通りに全速力で走って行って。そして、それから許してあげるよ」

「そ、それだけ……？」

「うん。あつ、そうだ。あつちは車が結構走ってるから、それだけ気をつけてね。じゃあ、僕達は行くから」

それだけ言うと、凶はなのはの手を取り、その場から去っていった。それから少しして、突然の展開に呆然としていた男は我に返り、急いで凶の言ったとおりに通りへと自転車を走らせた。本来ならもういない人間の言葉など聞く必要はなかったのだが、何故だが、その願いを拒絶する事は出来なかった。

そして、大通りに出て、ほっと一息ついた途端、

横から、トラックが迫って来ていた。

「……………！！」

このまま行くと、トラックと衝突する。そう思ってブレーキを握るが、作動しない。慌ててブレーキ部分を見ると、見事に破壊されていた。ありえない。さっきまではあったのに。そこまで考えて、凶の顔が浮かんできた。あの、優しそうな悪魔の笑みが。

「……………ああ」

そして、悟った。どう転んでも、自分は死んでいたのだと。そして、全てに絶望し、心が崩壊した男は  
数秒後に、宙を舞った。

「……さようなら、名前も知らないお兄さん。あなたの最後が全てが壊れた末の最後でありますように、と」

「？ まーくん、なにブツブツいつてるの？ けど、そんなまーくんも大好き!!」

「ははっ、鬱陶しいなあこの子」



## 少年と少女の朝（後書き）

感想を見てみたら、一件着てました。ああ、これが小説を書く喜びなんだなあとか思ってた。y o uさん、本当に感想有難うございました。

## 少年と少女の学校生活（前書き）

かなり駄文っぽい……。なお、今回かなり原作と乖離してますので、苦手な方はここで回れ右したほうが良いと思います。

## 少年と少女の学校生活

私立聖祥大付属小学校は、海鳴市で最大規模の小学校だ。施設も多く、環境もいい。ついでにエレベーター式。私立ゆえに受験の必要はあるものの、入学すれば充実した学校生活を約束できる。

その為入学希望者も多く、毎年一癖や二癖もある生徒が数多く入学してくる。

「今、世界は大変な事になってるだろ？ 環境問題とか、異常気象とか、まあ、例を挙げたら数え切れないくらいにね」

「……それで？」

「でね、僕は思っただよ。そういった問題を解決するために、全ての人たちが手を取り合って頑張っていくべきだって」

「まーくん、その台詞全然似合わないね。けどそんなまーくんも大好きー!!」

「で、凶くんはこれからどうすればいいと思うの？」

とある教室で、4人の少年少女が集まって何かを話していた。椅子に座り、身振り手振りをしながら言葉を伝える少年 破乃宮 凶。その前に金、茶色、紫という統一感ゼロの髪色をした少女達が座っていて、凶の話を聞いていた。

金髪の少女     アリサ・バニングスは疑い深げに。

茶髪の少女     高町なのはは今にも凶に抱きつきそうなのをアリサに静止されながら。

紫の髪の少女     月村すずかは純粹に興味を持ちながら。

「良く聞いてくれたすずかちゃん!! だからね、僕はこう思うんだ。  
ピーマンなんて滅んでしまえ、ってね!!」

「ほーら結局関係ない話だったじゃない！！　だから聞くだけ無駄  
って言ったのよー！！」

「無駄なんてこの世にはピーマンとパプリカとゴーヤとその他諸々  
しかないー！！」

「ないって断言しないんだ。けど、そんなまーくんm（ry」

「あんたは黙ってなさい！！　大体ねえ、凶！！　あんたはなんで  
いつもいつもそうやって話を台無しにするのよー？」

「そんな怒るなよアリサちゃん。お詫びにほら、この卵焼きをあげ  
るからさ」

「あ、ありがと……ってこれ、私のお弁当のじゃない！！　なに勝  
手に取ってんのよ！？　ていうか何時！？」

「答えは秘密！　何故なら……その方がカッコイイからさー！！」

「うがああああああああああああああああああああああー！！」

「あ、アリサちゃん落ち着いてー！！」

「ふういんが　とけられたのー！！」

「な、なのはちゃんも落ち着いてー！！」

机から身を乗り出して、今にも凶に襲い掛かりそうなアリサ。アリ  
サの呪縛から逃れ、別の意味で凶に襲い掛かりそうなのは。そん  
な暴走状態の二人をすずかが涙目で宥め、その光景を元凶である凶  
は、面白そうに眺めていた。

こんな4人のじゃれあい、3年1組の日常風景である。

そもそも、彼等がこういった関係になったのは、とある事件が原因である。事件といっても、そんな大袈裟なものではなく、すずかのカチューシャを、アリサが悪戯感覚で盗ったという、誰もが一度はやりそうな事である。

『……ねえ、そのうざったい金髪と紫頭』

『な、何よあんた！　というかうざったいってどういう事よ！？』

『む、紫頭って……私？』

『そのままの意味だよ金髪。あと、あなた以外に紫色した頭がどこにいるの？』

そこに、なのはがふらりとやってきた所為で、ただの悪戯で終わるはずだった事が、無駄に拡大してしまったのである。

『あ、あんた！　私にそんな口きいていいと思ってるの？』

『知らないよそんなの。それに私、今凄く怒ってるの。折角まーくんとイチヤイチヤしてたのに、あんたらが嫌いから……返して！　さっきまでの甘くて切ない時間を返して！！』

『……えっと、なんかゴメン』

『謝るくらいなら……死ねえ！！』

『うわっ、なにこいつ！？』

『え、あ、うえ？』

そこからは、すずかを放っておいてのキャットファイトだった。ア

リサが怒り任せに放つ拳を避け、その隙になのはがアリサの鳩尾に膝蹴りをかまし、一瞬呻いた後、お返しとばかりにアリサのアップカットがなのはに炸裂し、仰け反るなのは。そして二人は距離をとり、再び激突。無駄にハイレベルな戦いだった。

『ああ、どうしよう……あつ！ バニングスさんの首がちよつと危ない方向に！ こ、今度はあっちの子から鈍い音が……！』

『結構冷静だね』

『きやあつ！？』

突然後ろから聞こえた声に、すずかはビクリと肩を震わせ、慌てて後ろを見る。そこには、優しい笑みを浮かべた少年がいた。少年は驚くすずかなど気にも留めず、二人の戦いを見ている。すずかも釣られて見ると、なのはとアリサが互いの拳を交差させ、互いの頬を殴りつけていた。俗に言うクロスカウンターというやつである。そのままふらりと倒れそうになり、なんとか踏ん張る両者。だが、互いに満身創痍で、あと一撃でも貰えば倒れてしまっただろう。

『で、止めないの？』

『え！？ き、君が止めるんじゃないの？』

『僕関係ないし。それに、もうちよつと見てみたいな』とか思っ  
て見たりしてます』

『で、でも……』

『おゝつと、再び両者が激突するぞ』

『え、嘘！？』

振り向くと、今にも殴りかかりそうな二人の姿が見える。一歩踏み出す二人。脳裏に浮かぶ、二人の最後。それを想像した瞬間、すずかは無意識のうちに二人に駆け寄り、

『いや、最後つてなn(r)y』

『や、止めて〜!〜!』

『ぐえっ!?!』

『あっ』

そして、すずかの体当たりによつて、二人は吹き飛び、そのまま動かなくなった。

……静まり返った空間。その中で少年がゆっくりとすずかに歩み寄り、その手を取った。

『……おめでとう!! 勝者は君だ!!』

『え……ええええええええええええええええええええええ!!?』

すずかの悲鳴が、聖祥に轟いた。

その後、二人はすずかの悲鳴を駆けつけた教員の手によつて保健室へと運ばれた。両者とも、顔や体に痣はあるものの、骨などには異常もなく、痣も数日で消えた。

それから、4人の間には奇妙な縁が芽生え、最初はなのはとアリサがいがみ合い、その度にすずかが必死で止めていたものの、暫くするとそういつた蟠りもなくなり、現在に至るのである。

「え、というわけで、以上の事から私の有能性が証明されるわけ……」

別室に移動し、凶達は授業を受けていた。ちなみに今の授業は算数で、やたら先生が自画自賛をしているものの、特になんの問題もなく進んでいた。

「……あつ、そういえば」

「どしたの？」

「何でどら焼き食べてるの？ でもそんなまーk（ry」

「もういいってばその件！ で、なんかあったの？」

アリサに口をふさがれ、少しムツとしながらも、なのははアリサの手を剥がし、ポツポツと語り始める。

「まーくんからのメールですっかり忘れてたんだけど。なんだか、変な夢を見たの」

「変な夢？」

すずかが聞き返す。なのははコクリ、と頷くと、何も言わない凶に疑問を抱きながらも話を続ける。



「なんか、知らない男の子が見るからにグロテスクな謎の生物Xに襲われてて、何だか私に『助けて』って言ってた夢……だった気がする」

「まあ、あれね。子供ゆえの痛い夢って奴でしょ？　まあ、あんたもまだまだ子供だったって事じゃない？」

「……そうだねっ！　けど、アリサちゃんみたいに老けてないだけましだと思うな！」

「……上等じゃない。表出なさいよあんた」

「……いいよ。そろそろ私も、決着つけなきゃと思っていたし」

「ちょ、ちよつと二人とも！　少し落ち着こう？　ねっ？」

今にも教室を出て行こうとする二人を、必死で止めるすずか。そんな光景を見ながら、

「……偶然、だよなあ」

凶は、ポツリと呟いた。

## 少年と少女の学校生活（後書き）

以上、第二話でした。やばい、マジで駄文だよコレ……。

## 少年と少女と始まりの時（前書き）

とりあえず、やっと話が進みます。

## 少年と少女と始まりの時

その日最後の授業を終え、凶達は帰路へとついていた。先頭を凶がいつもと同じ笑みを浮かべながら歩き、その後ろのすずかは時折後ろを見ては苦笑し、凶と他愛も無い話を続ける。

「……ちつ、0勝0敗50分ね。いい加減私に一勝させなさいよ」

「嫌だよそんなの。私が損するだけだし」

「……この変態」

「……若年増」

そして、更に後ろで、ボロボロなのはとアリサがどこからか持ってきた木の杖で体を支えながら歩いていった。ふと目が合えば悪態を付き合い、どちらともなく視線を逸らした。その光景をすずかは苦笑してみていた。

「……あつ、そうだ。凶くん、今日もメイドさん来るの？」

「ん〜、多分ね。いつもそろそろ現れるし」

「……私、あの人嫌い。まーくんにやたら近付くし」

「申し訳ございません。それが私の使命ですので」

「にやっ!？」

突然の声になのはは奇声を上げながら後ろを向くが、そこには誰もいない。首を傾げて前を見ると、長身のメイド服を着た女性が凶に頭を下げているのが見えた。

「お待たせいたしました、凶様」

「いつもありがとね、メイドさん。ところで、今日は何分前から此処に？」

「60分ほど前から……遅かったですか？」

「いやいや、むしろ速いくらいだよ」

そっいつて微笑む凶。それに釣られて、メイドさんと呼ばれた女性も僅かに微笑んだ。その光景を、なのはは苛立ちながらも、ただ黙って見ていた。

メイドさんと呼ばれた彼女は、なのはが凶と会ったところには既に凶の側にいた。名前もなく、姓もなく、ただ凶の為に生きると豪語して止まないメイドさん。凶にいつ出会ったのかと聞いたところ、

『さあ?』

という答えが返ってきた。その際、からかわれていると思い、当時まだコントロールできていなかった過負荷<sup>マイナス</sup>を暴走させてしまい、何人もの隣人を発狂させたと言う事があったのだが、それはまた別の話。

とにかく、だ。メイドさんは常に凶の側にいて、凶を守ってきた。それには非常に感謝しているため、なのはは凶の隣りに女性がいるという事実<sup>に</sup>に苛立ちながらも、決してメイドさんには手を出さなかった。……まあ、その後ストレスが爆発して大変な事になったりするのだが。

「じゃあ、僕達はこの辺で。じゃあね、アリサちゃん、すずかちゃん」

「ばいばい!」

「じゃーねー!」

「また明日〜！」

軽く手を振り、凶達はアリサたちと分かれる。同時に、静止するアリサの存在がいなくなったため、なのはは満面の笑みを浮かべて凶に駆け寄り、その腕に抱きついた。

「超重いんだけど」

「デリカシーない男の子は嫌われるよ？　まあ、そんなまーくんも大好きだけどね！！」

「わがまま言う女の子も嫌われるらしいよ。少なくとも、僕なら即ぶっ壊すね」

「まーくんに壊されるのなら喜んで！！」

「うわぁ」

溜息を吐き、凶は再び歩き出す。相変わらずなのはが腕に抱きついたままだが、振り払う事はしない。その事実になのはは笑みを濃くし、更に強く抱きついた。その後ろを、無言でメイドさんがあるいている。……傍から見れば、かなりシユールな光景だろう。が、本人達は気に留める事もなく、そのまま歩き続ける。

助けて!!

その時だった。凶となのは頭に、声が響いたのが。

「……今の、なに？」

「さあね。しかし、突然助けてとか。もう少し順序って奴を考えたほうがいいと思うな」

「？……凶様、なのは様。何かありましたか？」

「えっ、メイドさんには聞こえなかったの？」

「……？いえ、何も」

滅多に表情を変えないメイドさんが、珍しく眉を顰めて、疑問の表情を露わにしている。なら、本当にメイドさんにはなにも聞こえないのだろう。何より、メイドさんが凶に嘘をつくこと事態がありえない。

誰か、僕を助けて!!

「また聞こえた！助けてって言うてるけど……どうしょっか？」

「ん……とりあえず、声の主を見つけてみようか。というわけで、なのはちゃん、お願いね」

「はい」

一度凶から離れ、目を軽く閉じる。同時に、頭の中に流れ込んでくる沢山の感情。怒り、悲しみ、恐怖、喜び、快楽。それを一つ一つ調べ、理解し、目的の感情を探る。

これは、高町なのはの過負荷・歪んだ三角心マイナスの力を応用した力だ。本来のこの過負荷の力は、『自身、他者の感情読み取り、それを増減させる』というものだ。コントロールできなかった当時は、ふとした事で相手の感情を爆発的に増幅させてしまい、何人も発狂

させてきた。が、今のなのはこれを完全に我が物とし、更にそれを応用する事まで可能となった。

現在なのは、自分の位置から半径50m内にいる生物の感情を読み取り、その中から、助けを求めているものの感情を探し出し、その位置を探っているのである。

「……あつ、これかも。何か、必死そうな感情があるよ」

それから10秒ほどしてから、なのはは目を開け、凶に報告する。凶は聞くと頷き、

「よし。じゃあ案内お願いね」

「うん！ えつと……こつちだよ！」

木の茂る方向を指差し、走っていくのは。それをメイドさんと共に追いかけながら、凶は笑う。

「……さあ、鬼が出るか蛇が出るか。壊し甲斐があれば、文句なしなんだけどなあ」



「……コレ？」

「……うん、間違いないよ。コレから感情が伝わってくるもん」

「いや、だってコレって……ええ？」

「困惑してるまーくんも大好き!!」

「ぶれないなあ、なのはちゃん」

目の前のモノを眺めながら、凶は困ったように頭を掻く。隣にいるメイドさんも、若干困惑顔だ。それはそうだろう、今、凶達の目の前にいるのは……、

「これ、フェレットじゃん」

紅と蒼の宝石を首から下げた、フェレットだった。

## 少年と少女と始まりの時（後書き）

次回から、無印編スタートです。

## 少年と少女とフェレット（前書き）

原作第1話後半辺り。話が進まないなあ……。。

## 少年と少女とフェレット

「はい、これでもう大丈夫ですよ」

「ご迷惑をお掛けしました」

「いえいえ、これがお仕事ですから」

頭を下げるメイドさんに、手を振りながら梶原愛は笑って答えた。その近くでは、置いてある椅子に凶の手を握って満面の笑みを浮かべているのはと、少し、否、かなり不満そうな表情をしている凶。その視線は、ベッドで眠っているフェレットに向けられていた。

(……期待させやがって。ぶっ壊してやろうかなあ?)

……フェレットの体が、ブルリと震えた気がした。

あの後、見捨ててやろうと思っていたそのまま帰ろうとしたのだが、意外にも動物好きのメイドさんが助けると聞かなかった為、渋々了承したのである。割りと身内に甘い凶だった。

「それにしても、珍しいフェレットねえ」

「確かにそうですね。これでも動物には詳しいほうですが、こんなフェレットは始めて見ました……あら？」

「? どうかしめましたか？」

「いえ、このフェレット……宝石の様なものを身に着けているみたいで」

「宝石？」

愛が見ると確かに、紅い宝石と蒼い宝石がフェレットの首から下げられていた。暫く眺めていると、さっきまで見ていただけの凶が歩いてきた。……腕に抱きついていてるのはこと。

「ふーん……まあ、あんなとこにいるって事は捨てられたって事だろうし、これ貰っていてもいいよね」

「えっ！？　そ、それは拙いと思うわよ……」

「いやあ、この小動物の所為で無駄な時間食って、更にはこっちの出費で治療してもらってるんだし。なら、これくらい問題ないと思うんだ」

「うつわあ、自分勝手。ちょっとなのは引いちゃった……けど、そんなまーくんも大好き！！」

（何なのこの子達……？）

「すみません。後で言うておきますので、とりあえず言うとおりにしてください。じゃないと後が怖いので」

若干げっそりとしている愛に、頭を下げて謝るメイドさん。その動作はかなり洗練されていて、明らかに慣れている。そんな二人を尻目に、凶はフェレットの首から宝石を奪い取り、

「はい、こっちの紅いのあげるよ。僕、蒼の方が好きだし」

「ほんと！？　ありがとうまーくん！！　家にいるときも外にいるときも授業中もご飯食べるときもお風呂のときもまーくんの結婚式のときもずっと身に付けて、私が死んだとき一緒に燃やしてもらうね！！」

「喜んでくれてなによりだよ引くわー」

「引いちゃうまーくんも大好き！！」

（なにこのミニコント？）

「すみません。もうすぐ終わりますので、少々お待ちください」

かなりげっそりしている愛に、再び頭を下げるメイドさん。やはり慣れている。そんなことをしていると、いい加減周りの騒がしさに気付いたのか、フェレットがゆっくりと目を覚ました。

「あつ、目が覚めたみたいね」

「……よかった。先生、本当にありがとうございます」

「喜んでくれて何よりよ。……それにしても、本当に珍しいフェレットね」

そんな話をしながら、フェレットに近付き、その頭を軽く撫でるメイドさん。暫く呆けていたフェレットだったが少ししてからそれに答えるように、メイドさんの指先を舐めた。

「……凶様。このフェレット」

「飼わないよ。僕こういう毛むくじらの奴嫌いなんだよね。……」

それより、このフェレット剥製にすれば割りと売れるんじゃないか？  
何か珍しいみたいだし」

そうですか、と呟くと、残念そうに俯くメイドさん。その姿を見た愛が胸を締め付けられるような感覚を覚えたりしたのだが、また別の話。

凶の悪意に満ちた発言にビクリと体を震わせ、恐る恐る凶を見て……、

「……き、キューキュー……」

「ん、何か騒ぎ出したよこいつ」

「……もしかして、これを返して欲しいんじゃないの？」

なのはが自分の赤い宝石をフェレットに見せる。すると、フェレットは鳴きながら必死に宝石に手を伸ばしている。どうやら正解らしい。

「ふーん。これ、そんなに大事なもののなか」

「……凶様。その宝石」

「やだよ」

「しかし、こんなに必死そうにしているのですよ？　宝石なら別のを用意しますから」

「……分かってないなあ、メイドさんは」

小さく溜息を吐き、宝石をポケットに入れる。それにフェレットは鳴き声を強くするが、凶は聞こえないかのように振る舞い、メイドさんに語りかける。

「いいかい？　ギブアンドテイクって言葉があるだろ？　僕はこのフェレットを助けて、更にわざわざ治療費まで払ってやったんだ。なら、何かしらの報酬がなきゃ、割りに合わないだろ？」

「見つけたのはなのは様で、治療費を払ったのは私ですが」  
「それに、ね」

ニヤリと、いつもの優しい笑みから悪魔のような冷たい笑みを浮かべ、言う。

「見なよこの顔。大事な物を返して欲しくて仕方なくて、見事に崩れた顔。こんな顔、早々見れたモンじゃないよ。それに、この顔が絶望に壊れると思うと……なんか、凄いワクワクするんだ」  
「……ですが」

未だ未練がましく見てくるメイドさんに、凶は頭を掻き、天井を見

ながら溜息を吐いた。そして、もう一度メイドさんを見て苦笑し、

「……仕方ないなあ。なら、これは返さないけど、このフェレット飼っていいよ？」

「ほ、本当ですか！？」

いつもの冷静沈着な態度を崩し、ずい、と凶に詰め寄るメイドさん。それに頬を膨らますなのはを、凶は手で制す。

「ホントホント。これならコレも身近にあるわけだし、フェレットも安心だろ？」

「ありがとうございます、凶様！」

「べつに〜。……まあ、あれだ。いつも世話してもらってるんだし、これくらいは、ね」

「まーくん柄になく優しく〜い！ そんなところも大好き！！」

再び抱きつくなのは。そんななのはの頭を軽く叩き、フェレットに近付く。

「……まあ、そういうわけだから。こいつは諦めてね。……あー、残念だな〜。久しぶりにぶっ壊せると思ったのに。今日は厄日だね」  
「……」

心底残念そうに溜息を吐く凶を、フェレットは警戒するように睨みつけている。が、

「……何まーくんを睨みつけてるの？」

なのはの ディストーション・ハート 歪んだ三角心 で恐怖心を増幅され、すぐに目を逸らした。



こうして謎のフェレット（名前未定）は、破乃宮家で飼われる事になった。

……後にこの選択に凶は後悔し、そして歓喜する事になる。

## 少年と少女とフェレット（後書き）

もしかしたら、もう1話更新できるかもしれません。  
できれば、次回で第1話終了したい……無理かなあ。

## 少年と少女と怪物（前書き）

作中に出てくる<sup>フーリング・スキナー</sup>心情暴露は、少年と少女と始まりの時に出てきたなのはのあれです。

## 少年と少女と怪物

夜の闇の中を、それは疾走していた。

夜空の澄んだ黒と違い、不純物が大量に混じったような濁った黒の、一軒家ほどではないものの、ワゴン車一台分はある巨体。その前面には、目と思わしき光が二つ、鈍く輝いている。その姿を見れば、10人が10人、怪物と言うだろう。

凄まじい速度で走るその怪物。その前を小さな何か　フェレットが走っていて、どうも、怪物はこのフェレットを追いかけているらしい。

「　　ッ！！」

その時だった。フェレットは前を見ると突然立ち止まった。その先には、茶髪のツインテールの少女がいた。少女は明らかに目の前の存在に対して驚いている。その少女の首にかけられている、紅い宝石を見ると、フェレットは安堵したような表情をした。

「

！！」

「ッ！　キ、キュッ！！」

が、空中に跳んでいた怪物の一撃によって、その表情は驚愕の色に変わる。何とか跳んでかわしたものの、落ちて来た衝撃で地面は砕け、フェレットも吹き飛び、宙を舞う。そのまま少女の元へと飛んで来るが、

「えゝ、何か汚れてて触るのやだゝ」

「キュッ！？」

少女はそれをヒラリとかわした。暴言を吐きながら。そのまま地面に顔から激突し、更に精神的ダメージまでくらったフェレットは、体を痙攣させながらその場から動かない。その原因となった少女はフェレットには目もくれず、怪物を見る。怪物も、その視線に気付いたのか動きを止めた。

少女は怪物を見つめる。怪物も少女を見つめる。

少女は露骨に嫌そうな顔をした。その意味を理解できるのか、怪物は目を光らせてから身構え、

「……うわ、なにこれ。凄い気持ち悪い……」

「!!」

二度目の暴言を吐いた少女  
高町なのはに向かって、突進した。

今から、数十分ほど前に遡る。

## 破乃宮宅

「まーくん、お風呂入る？」

「えー、だつてなのはちゃん、一緒に入るとやたら僕の体見て来るんだもん。ただでさえこのままだと貞操が奪われるんじゃないか？  
って思つてるのに……ライオンに生肉放り投げるのと同じぐらいの愚行だよ？ これ」

「大丈夫！！ 痛くないから！！ それよりも、警戒しているまーくんも大好き！！」

「うわー、ヤル気満々なんですけどこの人」

目付きの危ないのはを、凶は警戒しながらメイドさんをチラリと見る。その目からは「助けてくれ」という感情が籠められていて、メイドさんは長年の付き合いからかそれを察したのか、コクリと頷く。

「なのは様。私の言葉を聞いてください」

「……なに、メイドさん。幾らあなたでも、私の邪魔をするなら……」

「本当に今、凶様の貞操を奪っていいのですか？」

「……どういう事、ですか？」

それまでの危ない雰囲気霧散させ、メイドさんの言葉に耳を傾けるなのは。それを確認し、メイドさんはゆっくりと、言葉を連ねていく。

「いいですか、なのは様。確かに、あなたにとって凶様の貞操は魅力的で、今すぐにも手に入れたいものでしょう」

「それが分かってるなら!!」

「しかし、です。なのは様。今貞操を奪うより、より時間をかけて関係を深め、その時に凶様の貞操を貰ったほうが、より喜びは増すと思われるのですが」

「っーかさ、これ小学3年生にする話じゃないよね」

凶の発言を完全に無視したのは腕を組み、目を瞑って考える。……謎の沈黙が部屋に満ちる。そして、なのははカッと目を見開くと、メイドさんの腕を取り、

「メイドさん！ あなた天才!!」

「恐縮です」

「やばいよこの人たち。どっかの『解析』のお兄さんより変態だよ」  
前世で一度だけ会った妹萌の二文字を掲げた青年を思い出し、凶は溜息を吐いた。そのテンションのまま、なのはに話し掛ける。

「ところで、何でうちにいるの？」

「えっとねー、ぶっちゃけあの動物病院からだとお母さん達の家よりまーくんの家の方が近いし、ぶっちゃけもう夜遅いし、何よりお風呂上りのまーくんが見れると思ったし」

「まあ、最後が本音だろうね」

「簡単に見抜いちやうまーくんも大好き!!」

抱きつくなのは。それを巴投げの要領で後方に投げ飛ばし、凶は二度目の溜息を吐いた。

あの後、まだ怪我が完全に治ったわけじゃないということで、フェレットを愛に預け、3人は帰宅した。……その時のメイドさんの残念そうな表情を、凶はいい加減面倒になってきたため見ていないフリをした。そして、凶がそろそろお風呂の時間だ、といったところで、冒頭に戻る。



「一応電話した方がいいよ？ 何か、後がだるそうだし」

「はい。そして、投げ飛ばしたにも拘らず申し訳なさそうな顔一つしないまーくんも大好き!!」

「何か、今回それ言う頻度高いね」

「まーくんの家だからね!!」

そのまま、軽い足音を響かせながら、なのはは廊下に走っていく。この家には凶と出会った日から数えきれないほど来ている為、自分の家以上に内部を把握している。そのまま、電話機の前まで立ち、高町家の電話番号を入れる。暫く呼び出し音が鳴り、やがて、電話が繋がった。

『もしもし、高町です』

出たのは母、高町桃子だった。その声からは少し焦燥感が感じられるが、なのはは気付いていない。

「もしもしお母さん？ なのははだけど」

『なのは!？ こ、こんな時間まで何処に』

「そんなことより、今日まーくんの家に泊まるから。じゃあ切るね」  
『そ、そんなことって……ちょっと、待ってなの』

ガチャリ。無機質な音が響く。用件を終えたなのはは、小走りで凶のところに戻る。とする。

お願い、誰か助けて！！

「……また？」

あの声が、再び頭に響いた。その声になのは不愉快そうに顔を顰める。

「……折角まーくんの家にいるんだから、聞くのはまーくんの声だけでもいいのに」

ボソリとなのはが呟くと、凶が廊下にやってきた。その顔は如何にも面倒くさそうだ。

「これ、あのフェレットだよね」

「どういう仕掛けかは知らないけど。全く、面倒な奴だよ。とつとどぶつ壊してやりたいけど、やるとメイドさんが悲しむしなあ……」

⋮  
⋮  
⋮  
⋮

「ん……じゃあ、私が行ってくるよ。どうせ動物病院だろうし。」

フリーリング・スキャナー  
もし逃げてても心情暴露使えば場所分かるし」

「ホント？ あゝ、助かるなあ。30分以内に帰ってこれたら、一緒に風呂に入ってあげてもいいよ」

「行つてきます！　後わたしを簡単に魅了しちゃうまいくんも大好き  
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」

陸上選手も真つ青なスピードで走り去るなのは。勿論、事前に心情  
・スキャナー  
暴露を使うのを忘れない。

……このとき、なのはの感情は歓喜でいっぱいになり、フェレットの具体的な感情までは感知しなかった。だから、気付かなかったのだろう。今、フェレットの感情が、焦りと恐怖に満ちていたのを。

土煙が上がる中で、怪物はあたりを見渡していた。変わらない表情からは伺えないが、恐らく困惑しているのだろう。やがて、ある方向を見て動きを止めた。そこには、自分が仕留めようとした標的、高町なのはが顔を顰めて立っていた。

「……何なのこの怪物。何か、やたら感情が大きいんだけど。不純物が無いというか……あれ自体が感情みたいというか……ん、良く分かんないな」

「き、来て、くれたんですね」

「ん？」

突然聞こえた声に、なのはは軽く驚き、すぐに近くの感情を探る。すると、目の前の化け物の感情のほかにももう一つ、感情を感じ取った。しかも、なのはの足元から。ちらりと下を見ると、フェレットが鼻を押さえながら、なのはを見上げていた。

「……え、もしかして、今のって……」

「はい。僕です。僕の念話を聞いて来てくれたんですね。ありがとうございます」

「いや、そんなのどうでもいいよ。いや、どうでも良くは無いけど。それより、あれって何？」

なのはは怪物を指差す。怪物は再び突進の体制をとっていて、今にも飛び掛ってきそうだ。

「その話は後でします。それより、僕に力を貸してください！僕の念話を聞き取ったあなたには、きっと魔法の才能があるはずです」

「……なんか、どんな話が進んでるけど、え、魔法って何？」

「さあ、その紅い石を、レイジングハートを手にとって！」

「聞いてる？ って、わっ！」

間一髪で感情の揺れを感じ取り、怪物が動くよりも早く、なのはは一步引いた。そして怪物はなのはがいた場所を通り過ぎ、壁に激突する。その間になのははフェレットを拾い上げ、怪物と距離をとった。

「あゝもう！ あとで話聞かせてもらっからね！！ で、どうすればいいの？」

「は、はい。まずレイジングハートを手にとって、僕の言葉を繰り返してください。目を閉じて、心を澄まして」

「ん、分かった」

言われたとおりになのはは目を瞑り、自身の感情を限りなく小さくする。スツと、胸が空っぽになる感覚を、なのはは感じた。

「じゃあ、行きます」

「じゃあ、行きます」

「あ、そこは真似しなくていいです。……気を取り直して。我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

ゆつくりと、言葉を紡いでいく。その間に怪物が迫ってきているが、今のなのはにはそれを感知できない。

「契約の元、その力を解き放て」

「契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

自然と、なのはの頭の中に言葉が浮かび上がり、フェレットの声と重なる。その間にも、怪物はどんどん迫ってくる。

「そして、不屈の心はこの胸に！！」

なのはは勢い良く目を見開く。すでに怪物は目の前まで迫って来ているが、なのはは気にせず、最後の一節を紡いだ。

「この手に魔法を！！ レイジングハート、セツトアップ！！」

詠み終わると同時に、なのはを中心に桜色の光が放たれ、怪物の体をバラバラに引き裂き、吹き飛ばした。

「……えっ、なにこれ。この後の事とか聞いてないよ?」

「……あつ！ す、すみません、ぼうつとして。と、とりあえず、あなたの思い描く鎧と杖を！」

「よ、鎧？　しかも杖って……あゝもう！　なるようになっちゃえ  
 ！」

適当に頭の中でイメージする。すると、光が集束し、なのはの体を包む。そして、光が消えたときには、白い服に身を包み、その左手には杖が握られていた。

[illegible]

なのはの叫び声が、あたりに響き渡った。

## 少年と少女と怪物（後書き）

やっと、原作の第1話部分が終わりました。……なんでこんなに  
かっただろう……？



## 少年と少女と魔法の力（前書き）

初めてのバトルパート。……バトル？

## 少年と少女と魔法の力

どおん、と、漫画なら大きな文字で書かれているだろう轟音が響く。その音に、そこら一帯に住んでいた住人達は慌てふためき、外に出て確かめようとするものすらいた。

「あー、びっくりしたなあもう。花火でもやってるのかな？」

その中で、その少年はいた。長くも短くも無い黒髪に、優しそうな顔。前をボタンで止めるタイプのパジャマを着た、その人畜無害の権化の如き少年は、先ほどの轟音に目を軽く白黒させて、あたりを見渡す。が、その原因を突き止めることが出来ないのを悟り、やめた。

「……まあ、当たり前か。それにしても、なのはちゃん大丈夫かなあ？ あの子、結構な頻度で厄介事に巻き込まれるし。無事、動物病院に着いてればいいんだけど……やめよ、このキャラ。僕の影響ぶち壊せるかな？ とか思ってたけど、僕にまでダメージが来る。うえっ、気持ち悪っ」

何かを吐き出すような仕草をした後、少年は優しげな、それでいて悪魔の様な笑みを浮かべた。

「まあ、絶対巻き込まれてるよねえ、なのはちゃん。十中八九、この原因はあのがっかりフェレットだろうし。じゃあ、動物病院にいても無駄か」

そんなことを呟いていると、目の前に分かれ道が見えた。少年は顎に手を置いて考え、

「……よし、こつちだ！」

右を指差し、左に進んだ。

「僕の直感って、壊す事以外となるとからつきしだし。まあ、大丈夫だろ」

ニコニコと、怖気の走る笑みを浮かべながら、彼は歩く。スキップでもしそうなほどにご機嫌で。

「なんか、とってもいい事が起きそうな気がする！！」

高らかに叫び、少年 破乃宮 凶は、次の角を右に曲がった。

「なんか、とってもめんどくさいことになった気がする！！」

高町なのはは、高らかと叫んだ。その表情には、後悔と苛立ちが見えていた。そんな彼女は今、改造した聖祥指定の制服のような服に纏い、先端に紅い石の付いた杖　　レイジングハートを持っていた。その横でフェレットが「成功だ！！」などと言っていて、なのははフェレットを殴りたい衝動に駆られた。

「……で、これからどうすればいいの？」

「！　は、はい！　今のあなたなら、あれを封印する事が出来るはずです。今の、魔法の力を手に入れたあなたなら」

「ま、魔法？　そんな漫画みたいなものがあるわけが……あつ、私の過負荷マイナスも十分漫画っぽいや」

そんな事を話していると、さっきバラバラになった怪物の破片が、ゆっくりと動き出した。そして、それが一箇所に集まると、

「

！！」

見事、元の怪物の姿に戻った。方向を上げる怪物を、なのはは面倒くさそうに眺める。

「うええ……やっと終わったと思ったのに」

「あれはジュエルシードによって生まれた思念体。そう簡単には終わりません」

「じゅえるしーど？ 宝石の種？ ……原石？」  
「違います」

そうか、違うんだ。予想が外れて少しだけがつかりし、なのははレイジングハートの先端を化け物に向ける。金の装飾品の中心にある紅い玉が、街灯の光を浴びて輝く。

「まあ、良く分からないけど、とりあえずその魔法の力を使えば、コレを何とかできるんだよね？」

「はい。あなたの魔力なら、確実に」

「OK。そろそろ30分経っちゃうし、さっさと片付けなきゃ」

『Shooting mode set up』

足を広げ、腰を落として構える。それに反応するかのように、レイジングハートの形状が変化し、なのはの足元に桜色の魔法陣が現れ、レイジングハートに光が集約される。

「……私とまーくんの邪魔をする奴なんか」  
『Divine』

レイジングハートから聞こえる機械音。同時に、集束が終わり、

「とつとと、吹っ飛んじゃえー！」  
『Buster』

光の奔流が、放たれた。それは、偶然だったのか、それとも生存本能のなせる業だったのか、寸前で右に動いていた化け物の半身を吹き飛ばした。そのまま光は徐々に消えていき、後には半身を失った化け物と、衝撃でばろばろになった車道のみが残っていた。

「おつしいなあ、もう。じゃあ、もう一回！」

「だ、駄目ですよ！ 幾ら撃ったって封印しないと！！ それに、もしさっきの家とかに直撃したら……」

「ん……正直、どうでもいいなあ」

「良くないです！！ 僕はジュエルシードを封印してもらうためにレイジングハートを渡したのであって、決して破壊行為をさせるために渡したんじゃないやしません！！」

「ふゝん……人に手伝わせておいて、よくそんな偉そうな口が利けるよね」

「そ、それは……」

フレットが言葉を濁している間に、怪物の体は元に戻っていた。が、攻撃する気配は無い。それどころか、どこか怯えているようにも見える。それはそうだろう。幾ら再生できるとはいえ、自分の体をあも簡単に吹き飛ばすような存在が目の前にいるのだ。怯えなはずが無い。そして、なのはとフレットが口論をしている間に、

「

！！！」

「「あつ」」

怪物は、二人（？）の上を跳び越えた。完全に怪物の事を忘れていた二人は、呆気にとられた。なのはは急いでレイジングハートを構えなおすが、

「あつ、やつと見つけたよ。って、なにその格好？ なのはちゃんってコスプレ好きだったっけ」

「まーくん！ 何でここに！？ 後、コスプレはまーくんが望むなら好きになるよ！！」

「そんな事言ってる場合じゃないです！　その人、今すぐそこから離れて!!」

「?　何を言ってる……お?」

突如、凶に影が射した。驚き上を見ると、黒い塊が凶に迫っていた。

「……え、なにこの様子よ」

そして、凶のいるところに、化け物が落ちて来た。

「うわああああああああああああああ!!　ど、どうしよう!!　今の人潰れちゃったあ!!」

「まーくん、大丈夫?」

「な、何でそんなに暢気なんですか!!　あの人、あなたの知り合

いなんでしょう？　なのになんでそんな……ひっ！？」

フェレットの話は、そこで止まった。話の途中でなのはがフェレットにレイジングハートを突き付け、歪んだ三角心を発動させ、フェレットの恐怖心を増幅させたのだ。ガクガクと震えるフェレットを、なのはは人を殺しそうな目で睨みつけ、忌々しげに言葉を吐き捨てる。

「……知り合い？　私とまーくんの関係が、知り合い程度だと思ってるの？　だとしたら、あなたの脳味噌はもう必要ないね。いい？　私とまーくんは、知り合いなんて、友達なんて、恋人なんて、夫婦なんてものを全て超越しているの。私がいてまーくんがいる。まーくんがいて私がいる。そんな、二人で一つの関係なの。それを、知り合い程度で済ませようとするなんて……あなた、私と喧嘩でもしたいの？」

「ご、ごごご、ごめ、んなさ、い……」

「それに、ね」

その時だった。怪物の体に異変が起きたのは。ピクリと動き、その体に輝が入っていく。その光景に、フェレットはなのはに恐怖しながらも啞然とし、なのははそれが当たり前、とて言うかのような表情でそれを見ていた。そして、体中に輝が入り、

「まーくんの過負荷相手じゃ、アレは役不足すぎるよ」  
マインナス

その体が、壊れた。そして、その壊れた怪物がいたところには、さつき潰されたはずの凶がいた。その表情はどこか怒ってるようで、フェレットを見ると、頬を若干膨らませながら歩いてくる。

「ねえ、そういう事はもっと早く言つべきだと思うよ。ただでさえ



僕ってあんまり動くの好きじゃないんだから、あんな突然言われたって、避けられるわけ無いじゃない」

「す、すみません……」

「……あれ？　なのはちゃん、もしかして使ってる？」

「だって、このフェレット。私とまーくんの関係を知り合い程度って……それと簡単に見抜けるまーくんも大好き!!」

「駄目だよ。あんまりそういう事しちゃ。ほら、さつさと過負荷解マイナスいて」

「……まーくんがそういうなら」

渋々、と言った具合になのは手を振る。同時にフェレットを襲っていた恐怖は消え、ほっと一息を付く。そして、ある程度冷静になったところで、

「……え？」

ある事に気付いた。今、フェレットが見ているのは怪物の破片。どいうわけかは知らないが、破裂する前の状況を見るに、これは十中八九凶がやったのだらう。それは分かる。だが、問題はそれだけではなかった。

（さ、再生されない？）

そう、あの化け物が再生しないのだ。あの、なのはの特大砲撃をくらって再生してい他にも拘らず、だ。これは、本来ならありえない事だ。

あの化け物は、とあるものから作られた思念体。思念体であるゆえに、その肉体は封印という物をしない限りは再生するはずだ。が、現に今、化け物は再生しない。一体何故？　フェレットがそう思っ  
て自分の世界に入りこんでいると、

「ねえ、これ、このままでいいの？ 何かめちゃくちゃグロいけど」  
「あつ！ そ、そうだ。今はそれどころじゃない」

フレットは軽く咳払いし、なのはを見上げる。なのはの表情は凶に怒られた所為か、親の敵を見ているかのようだった。一瞬、申し訳ないと思ったが、すぐにそんな思考は忘れる。

「……では、目を瞑ってください。そして、心に浮かんできた呪文を。それが、封印の呪文です」

「浮かんでくる呪文……呪文……え、これを言わなきゃいけないの？」

「なのはちゃん、がんばってー（棒読み）」

「うん！ 頑張るからちゃんと見ててね！！」

不満そうな表情から一転、花がほころぶかのような笑みを浮かべ、怪物の残骸にレイジングハートを向ける。そして、息を軽く吸い、

「リリカル・マジカル」

「うわっ」

「封印するは忌まわしき器、ジュエルシード！！」

「何自然に合わせてんの？」

「ジュエルシード、封印！！」

『Sealing mode・set up』

再びレイジングハートの形状が変化し、先端から光が噴出し、翼のように広がる。そして、光の帯が放たれ、残骸に巻きつく。

『Stand by, ready』

「ジュエルシード、シリアルXXI、封印！！」

『Sealing』

そして、帯が残骸を貫いた。

「……………なにこれ、石？」

残骸が消滅した後、あった場所には残骸の代わりに青い石が落ちていた。それを凶は拾い上げ、首を傾げる。

「ねえ、これって何……………あらら」

「どうしたの？」

「そのフェレットさん、おねむの時間みたいだよ？」

「あつ、ほんとだ」

凶が指差したところには、さっきまで喋っていたフェレットが倒れ

ていた。とりあえず、凶はフェレットを拾い上げ、そのまま抱きかえる。なのはから殺気を感じるが、凶は気にしない。……フェレットは震えていたが。

「ねえ、まーくん。そんなの放っておこうよ」

「そういつわけにもいかないんだよ。こいつに何かあったらメイドさんがひっじょーに悲しむし。それに、さ」

「？」

一端、言葉を切る。そして、悪魔の笑みを浮かべる。

「何だか、いい事が起こる予感がするんだ。主に趣味関係で」

「……ああ、なるほど。まーくん、破壊<sup>そっち</sup>方面に関してはかなりカンがいいもんね」

「その通り。良く出来ました、と。……さて、さつさと移動しよう。何だか騒がしくなってきたし」

凶の言うとおり、遠くの方からサイレンの音が聞こえ、若干赤い光も見える。凶はその場を去ろうとし、振り向いて壊れた壁や道路を見る。

「……20点。無差別に壊すって、獣と同じだからねえ。僕等は人間なんだからさ」

「まーくん？」

「ああ、ごめん。行こっか」

今度こそ二人は、その場を後にした。

「あっ！　そ、そういえばお風呂は……」  
「残念でした。とっくに30分オーバーしてるよ」  
「……フェレット潰す」

少年と少女と魔法の力（後書き）

次回、ユーノ惨殺ショーです（嘘）

少年と少女と魔法使い、始めました（前書き）

やっと書けた……。説明って、何か苦手です。

## 少年と少女と魔法使い、始めました

「はあ、はあ、はあ……こ、ここまでくれば、大丈夫、だよな？」

「多分ね」

「……そういえば、まーくんの疲れてるところって見たこと無いけど、疲れたことってあるの？」

「さあ？」

あれから走り続けて、なんとか近くの公園に着いた彼等は、そのベンチに座り込んでいた。なのはは凶を恨めしげに見つめていると、突然横からタオルを差し出された。

「お疲れ様です、なのは様」

「うにやああああああ！ め、メイドさん!？」

「いつもありがとね、メイドさん」

「いえ、これが使命ですので」

タオルの持ち主は、メイドさんだった。驚くなのはと対照的に、何事も無かったかのように振舞う凶。恐らくもう慣れているのだろう。……いや、性格的なものもあるだろうが。

「なのは様、お顔が汗まみれですので、タオルでお拭きになったほうがよろしいかと」

「あ、ありがとうございます……ねえ、まーくん。メイドさんって、何で毎回突然現れるの？」

「さあ？ 何か、どこにいても現れるんだよねえ。本人曰く、『私は好きな時に、好きな場所にいることができる』らしいよ？」

「……それ、完全に異常じゃ<sup>アフノーマル</sup>ない？」

「もしくは過<sup>マイナス</sup>負荷。それとも……まあ、どうでもいいよ」



笑って話を終わらせる凶に、なのはは眉を顰める。そして、こつそりと歪んだ三角心ディストーション・ハートを使い、凶の感情を読み取る。今、凶の中にあつたのは、メイドさんへの信頼感だった。それを感じて、なのはは頬を膨らませた。

いつも他の人たちに笑顔を振りまいている凶だが、実は信頼出来る人間は殆ど存在しない。無論、なのはは自分が信頼されている事は知っているし、それは非常に嬉しい事なのだが、

(……まーくんに信頼されるのは、私だけでいいのに)

やはりメイドさんは嫌いだと改めて思うのはだった。

「ところで、凶様。何故フェレットを持っているのですか？ それと、そのなのは様の格好は？」

「へ？ ……あつ」

メイドさんの言葉で、なのははようやく自分の状況に気付いた。なのはの今の格好は、さつきと同じ白い服に、杖を持った状態だ。ふと、メイドさんの感情を探してみると、そこには困惑が二割と、理解が八割あった。……理解？

「う、うにゃああああ！ち、違いますよメイドさん！！別に、コスプレ趣味に走ったわけではなくて……」

「大丈夫です。まだ驚いてはいますが、別にそういった趣味の方は少なくは無いらしいですよ。だから、胸を張ってください」

「だから違うんですってばー！！」

「う、うう……」

その時、突然呻き声が聞こえた。声のした方を見ると、凶に抱えられていたフェレットが目を覚ましていた。が、同時に凶の手の中から消えた。

「……ねえ、この腐れフェレット」

「……え？ な、なにこの状況？」

「あんたの、あんたの所為で……まーくんのお風呂が台無しになったじゃないのおおおおおお！！」

「ぐ、ぐえっ！？ い、いや、そんな、の、しらない」

「知らないですんだら、警察なんていららないの！！」

首を絞められ、ブンブン振り回されるフェレット。それを凶が面白そうに眺めていると、なにやら視線を感じた。チラリと見てみるとメイドさんが無表情で、尚且つ何かを訴えかけるような目で凶を見ていた。少ししてから、凶は肩を竦める。

「あゝ、なのはちゃん。そこらへんで止めてくれない？ そのフェレットに聞かなきゃいけない事があるんだし、また気絶されたら困るんだよね」

「……まーくんがそう言うなら」

（……フェレットに何を聞くつもりなんでしょうか？ ……ハッ、まさか、動物の声を聞けるようになったという設定？）

何故かメイドさんから生暖かい視線を受けているが、凶は受け流した。少しして、落ち着いたフェレットをベンチに置く。

「……あ、有難うございます。えっと」

「破乃宮 凶。君が外国の人が何かだったら、マガツ・ハノミヤの方が分かりやすいかも。で、こっちが僕の友達の高町なのはちゃんね」

「高町なのは。仲良くしたくないから高町でいいよ」

「え……えっと、ゆ、ユーノ・スクライアです。ユーノでいいですよ」

なのはに対して、いや、凶に対してもどこか怯えているような態度を取りながら、フェレット ユーノは自己紹介を始める。

「ふむふむ。じゃあ、ユーノって呼ばせてもらうよ。……で、とりあえず聞きたい事があるんだけど」

「はい。あの怪物の事ですよね」

「いや、それもあるんだけどさ。……なのはちゃんあの格好、何とかなんないのかな？」

「あつ、そうだ！！ ねえ、これどうやって元に戻すの！？ さつきからメイドさんの視線が嫌で仕方ないんだけど！！」

「あつ、それならレイジングハートに頼めば」

「レイジングハート！ さつさとこの服消して！！」

『All right・barrier jacket is released・』

レイジングハートから機械音が聞こえ、同時になのはが光に包まれる。少ししてから元の私服を着たなのはが、石に戻ったレイジングハートを持って立っていた。

「あゝ、やっと消えた……で、どういう事だか説明してくれない？」  
「は、はい……分かりました」

そして、ユーノは話し始めた。ここまでに至る経緯の全てを。

「……まず僕は、この世界の人間じゃありません」  
「フェレットじゃん」  
「あつ、この姿は魔力が回復する為の、いわば省エネモードなんです」

「まあ、どうでもいいけど」  
「えっ!?!」

驚くユーノを尻目に、ちらりとメイドさんを見る。未だにごろごろと転がっている彼女は動物好きだ。そんな彼女が、実はこのフェレットが人間だったと知ったら、どう思うだろうか……?

「……それは置いて、と。じゃあ、続きどうぞ」

「……はい。えー、コホン。僕はこの世界とは別の世界、次元世界と呼ばれる幾つかの世界の一つからやってきました。あつ、この地球も、次元世界の一つなんですよ」

「勝手に次元世界とか呼ぶとか……いやらしい」  
「え、えつと……続けますね」

凶の何ともいえない雰囲気若干押され気味のユーノ。

「それで、僕達スクライアー族は、そんな次元世界を渡り歩いて、遺跡の発掘や調査をしている一族なんです、とある次元世界で、ちよつとしたものを手に入れたんです」

「あるもの? なに、遺跡の中のミイラとか? ……スクライアーの人たちって、墓荒らしが趣味なの?」  
「違いますよ!!」

自分の部族を馬鹿にされ、思わず声を荒げて反論した。が、凶はまるで反応がなく、それどころか「続けて」と手で促していた。どこか釈然としない思いを抱えながらも、話が進まないと判断したユーノは話を続ける事にした。

「……僕達が手に入れたのは、ジュエルシードというロストロギアです」

「専門用語はやめようぜ!!」

「あつ、すみません。んゝ、詳しく話すと長くなってしまうので、とりあえず、途轍もなく危険な代物だと考えてください」

「ok把握」

okじゃねえよ。ユーノの額に青筋が浮き上がった。が、これから話す事を考えて、思わず俯いてしまった。

「……続けます。それで、そのジュエルシードというのはロストロギアの中でも相当危険なもので、持ち主の願いを、かなり歪んだ形で叶えてしまうものなんです」

「……願いを？」

「はい。だから、僕はジュエルシードを速やかに封印しようとして輸送してたんですが……その途中の事故で、この世界に落としてしまったんです」

「なんて事をしてくれてんだお前はあああああああああ！」

「！」

「!？」

突然の怒声にユーノは驚き、そのままゆっくりと顔を上げる。が、凶の顔は至って普通だ。

「……とか言ってみたりして。ど、吃驚した？」

「……僕、本気で怒っていいですか？」

「却下。さあ、話を進めるんだ」

「……………はい」

ユーノは思った。元の姿に戻れたら、こいつを思いっきりぶん殴ろうと。

それが、いけなかった。

「……ねえ君、まーくに助けてもらったよね？　なのにさ、何でそういう事思ってるの？」

「あつ……ご、ごめんなさい……って、あなた、心が読めるんですか！？」

「そんな事はどうでもいいの」

突然、今まで全く口を開かなかったなのはが、突如口を開いた。ユニノが凶を殴ろうと考えたとき、当然悪意が感情として現れる。それに、感情を理解できる過負荷マイナスを持ったなのはが、ましてや凶の事なのだ。反応しないはずが無かった。

「なのはちゃん？　別に彼が何感じたのかは知らないけど、別にどうでもいいんだけど？」

「まーくんが気にしなくても私が、ううん、私だから気にするの。」

私にとって、まーくんは私の全てなの。まーくんがいるから今の私がいるの。まーくんは、私には家族よりも、知り合いよりも、友達よりも、この町よりも、この国よりも、この世界よりも、比べ物にならない程に大切な存在なの。それを、そんな顔で見るなんて……」

虚ろな目でフェレットに近付いていくのは。彼女は、ほんの数年前に過負荷に目覚めたばかりだ。凶のように生まれた頃から目覚めていたわけでもなく、そこまで神経が凶太いわけではない。更に拙いのはその感情の矛先が破乃宮 凶だったことだ。だからこそ、彼女はここまでの狂気を発している。……過負荷を全開にして。

「あ、うあ……」

恐怖が、ユーノの体を満たしていく。しかも、恐怖の増加が、止まらない。

声が出ない。

震えが止まらない。

冷や汗が止まらない。

この状況が信じられなかった。目の前にいるのは、元の姿に戻った自分と同じくらいの少女だ。しかも、とびっきりの美少女。きっと、その笑顔一つで多くの人を幸せに出来るだろう。だからこそ、そんな少女がこの恐怖を生み出している事がユーノには信じられず、そして恐怖は更に増加する。

[illegible]



って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝  
って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝  
って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝  
って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝  
って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝  
って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝  
って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝って謝

「ご、ごめ、ごめんなさ」

「遅い。もう壊れちゃ」

「はい、そつこまでよつと」

その時だった。2人（？）の間に、凶が入り込んできたのは。

「ま、まーくん!？」

突然の状況に、なのはは恐怖の増加を思わず止めてしまうほどに驚いた。そんななのはに対し、凶は軽い足取りでなのはに近寄り、鼻が触れ合いそうになるほど顔を近づけた。

「落ち着きなよなのはちゃん。僕、彼に聞きたい事がいっぱいあるんだ。それに、壊すのは僕の専売特許だよ?」

「で、でも! あの手フェレット、まーくんを……」

「こら。女の子が糞とか言っちゃ駄目だよ。……あんまりおいだが過ぎると、僕も『壊れた壊し屋』をフルで使うよ?」

「うっ、けど……ただ……」

最初ほどの勢いをなくし、どこかいじけたような仕草をとるなのはに肩を竦め、その手を取った。同時に、なのはの顔が真っ赤に染まる。

「ま、まままままーくん!? まさかのまーくんからのアプローチ!？」

「君って攻められると弱いよね。まあ、それはともかく。……なのはちゃん」

「ひゃい!！」

噛んだ。が、凶は敢えて触れずに続ける。

「僕も、君の事が好きだよ。君の事をこの世で一番信頼してる。だから、君を壊したくないんだよ。だから、さ。今日は退いてくれないかなあ？」

「……まーくんがそういうなら」

顔を赤くしたまま、恥ずかしそうに俯くのは。そんなのはに笑みを浮かべ、その頭を撫でる。

「じゃ、ユーノ君を助けてあげてよ。あれじゃあ何にも聞けないよ」  
「う、うん……」

凶の体からちらりと顔を出し、ユーノを見るのは。同時に、ユーノの恐怖が急激に消え去っていく。ユーノの意思に関係なく。それに本来なら恐怖を感じるはずなのに、恐怖は感じず、薄れていく。

「……あ、あれ？」

「ごめんね、うちのなのはちゃんが。けど普段はとってもいい子なんだよ（僕限定だけど）。だから、許してあげてね」

「い、いえ……僕の方こそごめんなさい。あなたたちは命の恩人なのに……」

「ははは。別にいいよ。ね、なのはちゃん」  
「うん……」

凶の背中に顔を埋めながら、なのはは小さな声で答える。その姿を見ると、この少女がさっきまでユーノを恐怖のどん底に落とし込んでいたとは思えなかった。

少ししてから、ユーノは軽く咳払いし、話を再開した。

「それで、僕は落としたジュエルシードを回収しようとして、この世界に来ました。それで、何とか一つ目のジュエルシードを見つけましたですけど……」

「返り討ちにあつた？」

「……はい。僕の魔力では、とてもジュエルシードを封印する事はできなくて……」

そう言い、ユーノは項垂れた。その光景を、シユールだ、などと暢気に思い、ちらりと後ろを見る。すると、さっきまで悶えていたメイドさんが、なにやら真剣な表情でこちらを見ていた。流石に、なのはが歪んだ三角心まで発動していたのだ。いい加減、子供の遊びでないと気付いたのだろう。

「……凶様。後でご説明をお願いします」

「分かってるよ」

それだけ言つと、メイドさんはお辞儀をし、再び黙りこんだ。

「……それで、僕は失った魔力が回復するまでこの姿になって、そして探したんです。僕の念話を聞き取れる、才能と資質に溢れた人を」

「……なるほど、ねえ。それが、僕となのはちゃんだったと？」

「はい。実際、なのはさんは僕が出来なかったジュエルシードの封印を成し遂げました」

それだけいうと、ユーノは体をしゃんと張り、凶となのはに向き直った。

「だから、お願いです。あなた達に、ジュエルシードの封印を手伝ってもらいたいんです」

沈黙が、辺りを覆いつくした。ユーノは、凶達から目を逸らさず、ただじっと見つめていた。凶は、なのはをちらりと見る。なのははすぐにその視線に気付き、頷く。それに凶も頷くと、

「いいよ」

「軽っ!？」

見事に、緊張した空気が砕け散った。これにはユーノも敬語を思わず崩してしまった。

「いや、最近刺激が足りないというか、物足りないというか……まあ、あれだよ。退屈してたんだ。だから、ね」

「た、退屈しのぎって……って、なのはさんはいいんですか!？」

「まーくんがいいなら、私もいいよ」

何だか、酷く拍子抜けしてしまった。普通、あれだけの目に遭えば、誰もが躊躇する筈だ。それが、目の前のこの少年少女は、片や退屈しのぎ、片やまさかの無条件同意だ。驚かない奴は、かなりめでたい。

「あつ、その代わりと言っては何だけどさ……全部終わったら、一つ頼んでもいい?」

「? 何ですか?」

「まだ内緒。全部終わった後のお楽しみさ」

それだけ言うと、凶は人差し指をユーノに差し出した。

「じゃ、ま。そういう事で、宜しくね、ユーノ」

「まーくんがするなら、私も！」

凶と同じく、指を差し出すなのは。それに、ユーノは視界が滲むのを感じながら、その両手をゆっくりと持ち上げ、

「……すみません。宜しくお願いします」

その指を、掴んだ。

（泣いているフェレットと握手する凶様となのは様……イイ）

その光景を見て、真剣だったはずのメイドさんの鼻から、赤い液体が垂れた。

少年と少女と魔法使い、始めました（後書き）

駄文だ……。凄まじく駄文だ……。

## 過負荷説明 その一（前書き）

題名の通り過負荷<sup>マイナス</sup>説明です。

ここでは、本作で登場した過負荷<sup>マイナス</sup>の説明を行います。  
というわけで、最初はなのはから。



## 過負荷説明 その一

### 過負荷名

『ディストーション・ハート  
歪んだ三角心』

### 所持者

高町なのは

### 能力

自分と相手の感情を感じ取り、自由に操作する事のできる過負荷。マイナス  
これは、幼少期のなのはが自分の感情を隠して過ごしていた為に生まれたと思われる。

マイナス  
この過負荷を受けた者は自分の意思に関係なく感情を操作されてしまう為、少しでもなのはに恐怖を抱けば、一瞬にして恐怖のどん底に落とされてしまう。更に、操作する前にその感情を理解するという過程が存在するため、行橋未造程ではないものの、相手の感情を感じ取ることができる。なのははこれを応用して、リーダーのように使用した。

マイナス  
なお、感情を操る過負荷の為、感情のない機械や、何らかの要因で感情がなくなってしまうた存在に対しては無力化してしまう。

## 過負荷説明 その一（後書き）

まあ、こんなもんかなあ？

多分、次回は無印終了後で、マイナス凶の過負荷、デストロイア『壊れた壊し屋』についてです。

## 少年と少女と過去の一片（前書き）

見てくださる方がいれば、お待たせしました！！

ようやく中間テストが終了したので、再開します。

といっても、ストックがもうほとんどないため、更新速度はかなり遅めになります。

では、最新話、どうぞ。

## 少年と少女と過去的一片

『先生つてさあ、ちゃんとごはん食べてる？』

小首をかしげながら、少年は目の前の少女　　正確には女性だが　　に問いかけた。少女は優しく微笑んで、答えた。

『ええ、食べてるわよ。どうしてかな？』

『パチだろそれ。食べててその大きさわげがないだろうに。あんまり子供舐めんなよロリババア』

『あなたは大人を舐めんな』

頭部に奔る衝撃。浮き上がる体。そのまま体はにぶち当たり、倒れてきたタンスに潰された。それを壊して起き上がると、そこには右膝を上げた状態で止まっている少女の姿があった。その姿と、やらと痛い頭から、自分が蹴られた事を少年は理解した。

『……先生、医者なのに患者を蹴っていいの？』

『医者である前に女よ。……それより、今『壊れた壊し屋』デストロイア使ったでしょ？　むやみに使っちゃ駄目ってあれほと言ったのに……』

『さすがに地面と一体化するような趣味はないもんで』

ぐらつく頭を押さえながら、ゆっくりと立ち上がる。頭を軽く振り、再び椅子に座る。それに合わせて少女も小さく溜息を吐き、椅子に座った。

『……で、今日は何するの？　壊す関係なら大歓迎なんだけど、違うよね？』

『当たり前じゃない。ただでさえあなたの過負荷マイナスは日々成長……い

え、退化してるのに、そんな事したら益々歯止めが効かなくなるわ  
少女は椅子から立ち上がると、少年の前まで歩いていき、少年の頭  
をそつと撫でた。微妙に蹴られたところに当たって痛かったが、  
空気を読んで我慢した。

『私は、あなた達を幸せにするためにここにいるんだから。私の目  
の黒いうちは、そんな事出来ないと思いなさい』

そう言つて笑つた少女の顔は、決意の色に満ちていた。だからだろ  
う。少年には、その少女がとても眩しかった。その姿を暫くの間眺  
め、少年は思った。

ああ、この素晴らしい人を、ぶつ壊したいなあ、  
と。

少女            人吉   瞳は、気付かなかった。彼            破乃宮 凶  
のソレは、もう取り返しのつかないところにあつた事を。

それから数週間後に、人吉   瞳はとある過<sup>マイナス</sup>負荷によつてその道を大きく螺子曲げられ、更に数週間後、とある事件によつてその人生を完膚なきまでに破壊される事になる。

ゆっくりと目を開ける。視界には見慣れた天井が広がっていて、それが先程の事すべてが夢であつた事を告げていた。  
起き上がろうとして、右腕に重さを感じた。ちらりと右側を見ると、

見慣れた茶髪が視界に入ってきた。頭を掻き、少し考える。

「……ああ、そういえば泊まってたんだっけ」

自分の腕に抱きついている少女、高町なのはのいる理由に、凶はようやく思い至った。

「だからさ、僕は思っただよ。君はもう少し節度という物を守るべきだと」

「えっ!?!」

「そんなに驚かれても」

どこか呆れを籠めた視線を向けながら、凶は茶碗に盛られたご飯を口に運ぶ。口いっぱいにお米特有の甘みが広がる。相変わらずいい仕事してやがるぜ。ビシッ、とメイドさんにサムズアップを送る。メイドさんもサムズアップを返す。……もう片方の手で、ユーノにビスケットをあげながら。

「ユーノ様、お味の方は如何ですか?」

「お、美味しいですよ……けど、食べさせられてるっていうのは、ちよつと……」

「！！？」

「そんなに驚かれても」

驚きの余り固まるメイドさんからビスケットをひつたく……ろうと思ったが所詮はフェレット。人間の力には敵わない。メイドさんに視線を向けるも、離す気配はない。がつくりと肩を落とし、ユーノは今の状況を甘受することにした。

前回のあの騒動の後、凶は洩るユーノを無視して凶はメイドさんに全てを暴露した。ジュエルシードの事。魔法少年＆少女をはじめた事、ついでにユーノがパチモノフェレットである事。さすがに驚くかと思っていたが、そこはさすがメイドさん。表情一つ変えずに全て受け入れてしまった。ちなみに、フェレットの件に関しては、

『今がフェレットなら、別にかまいません』

との事だった。いいのかそれだと思わなくも無い。

「さて、と。メイドさん」  
「はい」



箸を置き、メイドさんに話しかける凶。メイドさんも餌やりを止め、膝元に手を置いた。

「学校の方にさ、僕となのはちゃんが休むって伝えといて」  
「かしこまりました」

質問する事無く、廊下に歩き去っていくメイドさん。そんなメイドさんを見送り、なのはは首を傾げた。

「まーくん、なんで私も？ ……！！ と、とうとう私の処」  
「違うよ」そんな簡単に人の希望を打ち壊すまーくんも大好き！！」

床で悶えるなのはを無視し、ユーノを見る。

「あのさ、なんか認識阻害的な魔法って使えないの？」  
「……ああ、結界の事か。使えるけど、何で？」  
「いや、昨日でジュエルシードが怖いもんだって分かったし」

そこで一旦会話を中断し、立ち上がる。そして、首から下げた青い宝石を手に取り、

「今のうちに、魔法の使い方、ってのを覚えておこうと思ってね」

## 少年と少女と過去の一片（後書き）

言い忘れてましたが、この小説で語られるめだかボックスの世界は、あくまで『破乃宮 凶』のいた世界であるため、原作とは大分乖離しています。

こういう設定が苦手だと思う方は、ここで読むのを止める事をお勧めします。……いや、本音言えばこれからも読んで欲しいんですけどね。

## 少年と少女と特訓と過負荷（前書き）

題名長い……まあ、気にしないで。

今回の話は、若干の自己解釈がありますが、軽くスルーしてください。

## 少年と少女と特訓と過負荷

実はというと、破乃宮家は結構広い。バニングス、月村ほどではないものの、少なくとも一般的な家の規模では比較にならないほど広い。なんせ、庭で100m走ができるくらいだ。そんな庭に4人――（？）はいた。

「さあ、特訓を始めようか」

「おゝ！」

「……特訓って？」

ユーノが聞き返すのも無理は無かった。何故なら、彼は突然首根っこを掴まれ、抵抗一つすることが出来ずにここまで連れてこられたのだ。そして、これである。ユーノの頭の中には、無数のクエスチヨンマークが浮かんでいるだろう。

「ほら、前に出てきた祟り神みたいな奴いたじゃん。あんなのここれから戦わなきゃいけないとなるとき、やっぱりそれ相応の準備は必要だと思っんだ」

「凶さん……で、なんでここで特訓なんだい？」

一瞬、ちゃんと考えてくれた事に対して感動したが、すぐに別の疑問が浮かんだ。基本的に、魔法は魔法文化の無い一般人にばれたらかなりまずいことになる。凶となのはに魔法の事を話したのだって、実はかなりギリギリだったのだ。もし拒否でもされて、それが時空管理局にばれたりでもしたら……思い浮かべて、ユーのは思わず身震いしてしまった。

「この位広ければ、それなりの特訓は出来ると思ったし」

「いや、そうじゃなくて。ここじゃ、一般の人たちにはれちゃうんじゃない……あ」

そこで、ようやく気付いた。凶もそのとおり、と言いたげに頷く。

「そつ。だから、ユーノに結界について聞いたんだよ。もし無かったらちよつと厳しいし、そもそも、魔法なんて危なっかしいものを秘匿する方法が無いわけないしね」

「……………」

思わず、ユーノは絶句してしまった。まさか、9歳児の小学3年生が、そこまで考えているなんて……。そういえば二人とも9歳児っぽくないような、という疑問は、この際置いておいた。

「じゃ、早速お願いね」

「う、うん。分かった。……ありがとう、凶。僕の為にそこまで」

「……え？ あ、うん……気にしないでよ！ 僕達友達だろ！」

「ほ、本当にありがとう凶！！」

感激の余り、届かないにも関わらず手を伸ばしてしまった。それに微笑み、凶はしゃがんで、その手を取った。美しい友情だ。

「……ねえ、メイドさん。まーくん、絶対そんな事考えてなかったよね？」

「ええ。本当に自分のためでしょうね。上手く誤魔化していました」

「でも、そんなまーくんも大好き！！」

「それは良かったですね」

……少し離れた所で、そんな会話があったのは別の話である。

「じゃあ、早速結界を張るね」

凶の手を離し、ユーノは目を瞑る。……その凶の手を、なのはがニコニコしながら掴んでいた事については、最早誰も突っ込まなくなつた。

ユーノを中心に緑色の魔法陣が現れ、広がっていく。そして、あつという間に破乃宮家を飲み込み、その場を異界へと変異させた。

「これが、結界つてやつか……すっごいなあ」

その光景に、凶もただただ感嘆するばかりだ。まさか、ここまでとは思っていなかったのだ。……隣りのなのはがそんな事を全く気にせず、凶の腕に頬を擦り付けていることについては、誰も突っ込まない。

「……ふう、成功だ。じゃあ、早速デバイスを起動して」

「おkおk。えっと……どうやんの？」

「あつ、そうだ。そういえばまだ、起動呪文を言ってなかったね。じゃあ、僕に続けて」

近付き、目を閉じるユーノ。それに合わせて凶も蒼色の宝石を握り締め、目を瞑る。

「じゃあ、行くよ。……我、宿命を抱きし者なり」

「（中二くせえ……）……我、宿命を抱きし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「契約の元、その力を解き放て」

言葉を紡ぐたびに、群青の魔力が凶の周りに出現し、その体を包んでいく。

「生命は海に、力は大地に」  
いのち

「生命は海に、力は大地に」  
いのち

「そして」

声が、重なる。なのはの時と同じく、凶の頭の中に、言葉が浮かび上がってくる。

「不滅の魂は、この内に。この身に魔法を。イモータルソウル、セトアップ!!」

そして、なのはの時と同じ、いや、それ以上の魔力が凶の体から迸る。その光景に、なのはは勿論、普段表情を崩さないメイドさんでさえ、驚いていた。

「ま、まさかこれほど凄いなって……あ、そうだ！ 凶！ 頭の中に、自分の思う鎧と杖を描いて!!」

「……こんなでいいのかな？」

返答が帰ってくると同時に、群青の光が消えていき、少しずつではあるが凶の姿が見えてきた。そして……、

『……あ？』

誰もがその場で固まった。当たり前だ。光から出てきた凶の姿は、なのはの姿を大きく上回るほどに、奇抜だった。



まず、服。てつきりなのはのような聖祥の制服基調のバリアジャケツトだと思っただのに、彼の姿は聖祥のそれとは大きく異なり、黒い、少し奇抜な制服を着ていた。その服を凶が懐かしそうに見ている辺り、彼が昔に着ていたのだろう。まあ、それはいい。が、次が問題だった。

「……凶。一つ聞いてもいい？」

「やゝ、そういえば箱庭学園の制服ってこんなだったなあ。あ、けどこれって生徒会専用のじゃ……あ、ごめんごめん。どうしたの？」

「えっと、その右手の奴、なに？」

そう、問題は右手だ。一言で言えば、巨大なドライバーだ。持ち手に相当する部分が橙色で、そこから1m強もある金属部分が伸びている。先が平たいため、マイナスドライバーだろう。そのドライバーが、肘近くから伸びていた。……杖って、言っただけなんだけど、ユーノは頭痛を覚えてしまった。

「え、知らない？ 空ゝ間ゝ湾ゝ曲」

「デイバイデイゝゝン」なのは様、そこまです」ぶゝ……でも、なんでそれにしたの？」

「その方がかつこいいからさー！」

「……ああ、凶の趣味か」

脱力し、地面に寝そべるユーノ。なんだか、どっつかれた気がする。無論、凶はそんな事全く気にしないが。それを分かっているからか、ユーノはすぐに立ち直り、次になのはを見る。

「じゃあ、次はなのは、お願い」

「はい。……えっと、レイジングハート、セットアップ！」

『stand by ready・set up』

レイジングハートからの電子音の後に、なのはは桜色の光に包まれ、純白の魔法少女となって姿を現した。その光景に、再び、ユーノは絶句した。

「き、起動呪文なしで……」

「なに？ それって凄いの？」

「う、うん。少なくとも、なってすぐ出来る様な芸当じゃないよ」

「だつてさ。凄いねなのはちゃん！」

「ありがとうまーくん！！ もう、これはこのままゴールインしか」

「じゃ、次行こう」

「すぐに流しちゃうまーくんも大好き！！」

何やら悶えているのはを綺麗に無視する3人。慣れたものである。

「じゃあ、早速魔法を使ってみよう。凶、まずは飛行してみよう」

「飛行、飛行……ガジェットツール！！」

「え、なにそれ」

『Flight wing』

咆哮と共に、凶のデバイス イモータルソウルに記録されていた術式が展開され、群青の翼が背中に出現し、凶が空を舞う。少し変だった気がするが、この際無視しようとユーノは思った。

「えっと……じゃあ、次は……うん、とりあえず砲撃魔法を撃ってみよう」

砲撃魔法。攻撃魔法の一つで、中距離攻撃の代表とも言える魔法だ。無論、使うには大量の魔力が必要だが、凶の魔力は、

なのはのソレを更に上回るほどだ。ならば、相当な威力のものが撃てる筈。ユーノには、確信すらあった。

「……まあ、やるだけやろうか。イモータルソウル！」

『Devilishness buster』

イモータルソウルに記録されている砲撃魔法。デイベインバスターとほぼ同質の砲撃魔法であるそれは、凶の魔力を用いて強大な砲撃魔法となる……筈だった。

「……あれ？」

念のため伏せていたユーノは、来るはずの衝撃が来ない事を疑問に思い、顔を上げる。宙には、未だイモータルソウルを構えた状態の凶が浮いていた。

「……あゝ、イモータルソウル。もしかして、僕って」

『はい、マスター。あなたには砲撃魔法の適正は存在しません』

「はっはっはっ、だと思ったよ、うん」

ゆっくりと降りてくる凶を、ユーノは呆然と見つめていた。……まさか。ユーノは胸の中に現れた疑惑を振り払うかのように、凶に言った。

「ま、凶！ 次は他の魔法を……！」

結論から言おう。凶は、魔法適正が殆ど存在しなかった。

「な、なんてこった……これほど膨大な魔力があるのに、それを使えないなんて……」

あれから、色々な魔法を試した。射撃魔法。広域攻撃魔法。近接魔法。防御魔法。移動魔法。捕獲魔法。結界魔法。補助魔法。そして、儀式魔法。とりあえず、ユーノが知りえる全ての魔法を試してみたが、このうち凶が使えるのは、近接と移動、それと補助魔法程度しかなかった。他は、適正が低いのではなく、適正が存在しない。更には、使用できる数少ない魔法でさえ、下の中程度の適正しか持っていないという驚きの結果だった。

「まあ、過負荷である僕がそんな才能に満ち溢れているわけないし。当然といえば当然なんだよね」

「過<sup>マイナス</sup>負荷？」

何の事だろう？ ユーノは考え、チラリとイモータルソウル（マイナストライバー）を見る。その視線に気付いた凶は首を振る。

「ああ、そういえばユーノには話してなかったっけ。ん……そうだな、人類の負け組、劣等種、まあ、そんな感じだと思ってくれればいいよ」

「……劣等種って」

「いいんだよ、事実だし。僕達過<sup>マイナス</sup>負荷は、生まれながらに敗北している存在なのさ」

そう、笑顔で答える凶を、ユーノは信じられないものを見る目で見ていた。凶は、決して自分を卑屈しているわけではない。それが当然の事だと思っているからこそ、こうも普通にいられるのだ。これが、本当に9歳児の考える事なのだろうか？ そこまで考えて、ふと、なのはに目がいった。

「もしかして……なのはもその、過<sup>マイナス</sup>負荷って奴なの？」

「うん、そうだよ」

「け、けど。彼女にはかなりの適正が、特に砲撃魔法に関しては、天賦の才としかいえないようないくらいの適正が存在するの……」

確かに可笑しな話である。確かに、なのはは過<sup>マイナス</sup>負荷だ。それは間違えない。だが、彼女は他の人間と比べて大きく劣っている、とは思えない。学校でも、算数では天才少女アリサ・バニングス以上の成績を取っているし、魔法だって、この通り。凄まじい才能を持っている。これは、過<sup>マイナス</sup>負荷では有り得ない事だ。

それに、凶はああ、と手を叩き、なのはの頭に手を載せる。それだけでなのはの表情はとろけきってしまったが、この際無視しよう。



立ち上がり、左腕（右腕はイモータルソウルが邪魔で振れない）を軽く回す凶。その姿を見て、ユーノは未だ納得は出来ていないものの、

（……けど、彼が今幸せなら、それでいいのかもしれない）

いくら敗者であろうと、幾ら劣等種であろうと、今、凶は笑っているのだ。ならば、自分がそれを気にする必要はないのかもしれない。とりあえず、ユーノはそう結論付け、

「うん。じゃあ、とりあえず使える魔法だけでも完璧に使いこなそう。幸い、封印は使えるみたいだし」

凶の後を追った。

余談だが、吹き飛ばされたなのは全員が完全に忘れていて、その所為でなのはが拗ねて碌に特訓が出来なかったらしい。





## 少年と少女と特訓と過負荷（後書き）

そういえば、いつの間にかユーノがタメ口だ……まあ、昨日のうちに何らかの話し合いがあったってことで。こまけえこたぁいいんだよ！！

## 少年と少女と初戦闘（前書き）

ひっそびさのバトルパート。が、何となく薄い気がする。……バト  
ルは難しいなあ……。

## 少年と少女と初戦闘

その発する唸り声が、神社を振るわせる。

犬のようにも見えるソレは、だがその巨軀と凶悪な外見から、人目で化け物だという事が分かる。

両足に生えた鋭い爪に、剥き出しの歯、そして、ギラリと光る双眸。保健所など出る幕もないほどのその化け物は、忌まわしき器ジュエルシードが原生生物を取り込んだことで誕生した怪物だった。

「……僕、犬は好きだけど。これはないわー」

破乃宮 凶が、頭を掻きながら立ち塞がっていた。……その手に、スポーツドリンクの入ったビニール袋を持って。

「……なんか、喉渴いた」

発端は、凶の発したその言葉だった。小さく呟かれたその言葉を、

メイドさんは見事聞き取った。

「今すぐ紅茶をお持ちします」

「んゝ、紅茶よりもポカリ ウエットな気分なんだよねゝ」

「……申し訳ありません。今、スポーツドリンクの類はありません」

ペコリ、と頭を下げようとするメイドさんを手で制しつつ、小さく溜息を吐き、ポケットの中を漁る。何か、硬い丸型の物が手に当たる。掴んでそれを見る。500円玉だ。恐らく、出し忘れたのだろう。

「じゃあ、ちよつくら買つて来るよ」

「凶様がですか？ 必要なら、私が買つてきますが」

「いいのいいの。たまには労働も大切だよね！」

ビシッと親指を立てる凶を数秒ほど見つめ、了解と言うかのように一礼した。それを確認し、さあ行こうと家を後にしようとしたが、手を引っ張られて動きが止まった。後ろを見ると、なのはが何かを言いたげに凶を見ていた。

「どつたの？」

「私も行く!!」

「パスで」

「そんなまーくんも大好きだけど何で!？」

信じられない、とでも言わんばかりに驚くなのは。凶は頭を掻き、諭すように話す。

「あのね？ 君、昨日家に帰ってないんだよ？ あんまり長くいたら、いい加減家族が心配するだろうに」

「えゝ、どうでもいいよそんなの。それよりまーくんといった方がよっぽど有意義だもん」

「僕はどうでもいいんだけどさ。前にそうやって、君のお兄さんが乗り込んできたじゃん。もうああいうのは勘弁して欲しいんだよ」

一、二年ほど前に、なのはが無断で破乃宮家に泊まりに来た事があった。が、次の日に何らかの方法で破乃宮家の場所を突き止めたなのはの兄、高町恭也が物凄い形相で呐喊して来た事がある。まあ、その時はメイドさんの通信空手拳で撃退したのだが。

「……でも、私。もつとまーくんと一緒に居たいよ」

「ふう……。仕方ないなあ。じゃあ今からスポーツドリンク買って来るから、それを飲みながら夕方くらいまでゆっくりしよう」

「ほ、ホント!? それって、二人つきりで!？」

「食いつきが良過ぎてちよつと気持ち悪いけど、そうだよ」

「生きてて良かったあああああああ!! あと平気で人を罵倒するまーくんも大好き!!」

太陽に吠えるなのはを一瞥し、凶はユーノとメイドさんに手を振り、破乃宮家を発った。……なのはがそれに気付いたのは、それから5分ほど後の事だ。

「微妙に遠いんだよな、コンビニ」

ビニール袋をぶらさげながら、凶は若干頬を膨らませ、不機嫌そうに呟いた。なのはが見たら卒倒するか理性崩壊するであろうその表情は、元々の柔和そうな表情が相成り、見る人を和ませていた。

「……それにしても、ジュエルシードってどうやって見つけるんだろう？ 毎回毎回ユーノを生贄にするわけにもいかないし……ん、参ったなあ……」

後でユーノに聞こう。そう結論付けて歩みを速める凶は、

(……？)

突然襲った謎の感覚に、足を止めた。肌に小さい針を刺されているかのような、いやな感覚だった。ふと、体の向きを変え、上を見る。この近くには神社があり、その感覚は、神社の方から感じる気がした。

「……まあ、行って見るか」

自らの感じるままに、凶は神社の階段を登り始めた。

そして、冒頭に至る。

『

!!』

「うおっとお！」

飛び掛るを間一髪で避け、凶は急いでイモータルソウルを取り出す。まだ待機状態であるそれは、貰ったときと同じ蒼い宝石の形をしていた。そして、イモータルソウルを握り締め、

「……どうやって、起動するんだろう？」

そういえば教えてもらってない。思わず頭を抱える凶。それが大きな隙となつてしまい、化け物はその隙について飛び掛る。

「あ」

『

!!』

間に合わない。直感か、前世での経験かは分からないが、それを理解した凶は、迫り来る凶刃を呆然と見つめていた。

『barrier jacket』

そして、凶の体は化け物によって、人形のように吹き飛ばされた。そのまま近くの木に激突し、その衝撃で木が折れ、轟音を立てて地面に落ちる。

凶の姿は土煙でよく見えないが、それに構わず化け物は凶のいるであろう場所に飛び掛る。

『smash driver』

が、その攻撃は土煙から現れた群青の一撃によって妨害された。群青色の何かが顎に命中して吹き飛んだ化け物は、しかし空中で体制を戻し、着地する。そして、土煙が晴れた後には、白い制服基調のバリアジャケットに、右肘から1m以上もある群青に光るドライバーを生やした凶が、座り込んだままドライバー イモータルソウルを突き出していた。やがてイモータルソウルから群青の光が消え、同時に凶は立ち上がり、イモータルソウルを見る。ボルスター辺りに取り付けられた蒼の宝石がきらりと輝いた。

「……何にもしないで起動って、出来たんだ？」

『はい。基本的に私達デバイスが持ち主をマスターと認めれば、起動時のサポートが行えるようになってますので。それより前、危ないですよ』

「言われなくともッ！」

再び飛び掛ってくる化け物をイモータルソウルで受け止め、さっきと同じ群青色の光を纏わせる。

スマッシュドライバー。凶の使える数少ない魔法の一つであり、デバイスを強力な打撃武器へと変化させて攻撃する、近接魔法の一つである。

そのまま化け物を振り払い、イモータルソウルを構える。化け物も同じ手段は通用しないと理解したらしく、姿勢を低くして待機する。緊迫した空気。互いは緊張で一步も動けない。が、これは返って都合がいい。凶は覚えたての念話をユーノへと使用した。



『やつほゝ。聞こえてるゝ?』

『わっ! ……吃驚したゝ。あつ、そうだ凶! 今ジュエルシードの反応が』

『うん、只今戦闘中。多分勝てないから、なのはちゃん連れて神社に来て。じゃ』

『分かった。……え、いまなんていった』

無理矢理切断した。あのまま行けば、頭にユーノの大声が響いていただろう。ただでさえ一度死に掛けたのに、再び隙を作るのはゴメンだ。

「じゃ、行こっか」

『はい。      s m a s h   d r i v e r』

再びイモータルソウルが群青の光を纏い、それを確認した凶が低空飛行を開始する。それを化け物は予想していたのか、突撃してきた凶を容易くかわし、飛び掛る。凶は何とか空中へと逃げる事で回避した。その頬からは冷や汗が垂れる。

(あつぶねゝ。あれ、一步間違ったら……)

《死んでましたね。ただでさえマスターのバリアジャケットの耐久力は低いのですから、あんなのを喰らったら一発でジャケットパージです》

……聞き捨てならない事を聞いた気がする。

(……え? それってホント?)

《本当です。マスターの魔力は確かに膨大なものです。歴代の魔道師の中でもトップクラス。それどころか、最も高いと言ってもいいかもしれません。ですが、あなたの魔力資質が低すぎてその魔力を

扱いきれないのです。今は私のサポートで下の中程度は使えていますが、これ以上を望んだ場合、私のサポートが限界を超え、内部で魔力が暴発します」

（ふむ。つまり僕は、性質<sup>たて</sup>の悪い爆弾って事か）

《Yes》

（そっかそっか

魔法少年、やめていい？）

《その場合なのは氏が機能しなくなり、ジュエルシードの暴走率が増加して、下手すれば世界崩壊を招きかねませんが、それでもよろしいのなら》

「やってやるぜえ！！」

通信を断ち切って再び特攻する凶。その目からは光る何かが流れていた。

イモータルソウルを振り下ろす。化け物は難なく回避し、凶の魔力資質の所為で中途半端すぎる威力のイモータルソウルは地面に減り込み、

「あれ、抜けない」

抜けなくなった。何度引つ張っても抜ける気配がない。大きすぎる隙だ。当然、化け物が見逃すはずもなく、好機とばかりに飛び掛り、口を大きく開ける。凶の脳内で頭からパクリといかれた自分の姿が思い浮かび、

「じよ、じようだんじゃ……」

『burst』

「え、なにそれこわ」

そして、凶を中心に群青色の爆発が発生した。

『s m a s h   d r i v e r , t i p e   b u r s t .   スマツシ  
ユドライバーの魔力の構築を解除する事で、制御をなくした魔力が  
暴走、そして、使用者を巻き込み爆発を起こします。どうですか？』  
「思い出が頭を駆け巡りました」  
『死ぬ間際に人は思い出が走馬灯のように蘇るようですよ。体験で  
きてよかったですね』

「……もしかして、人を苛めるの好き？」

『はい、大好きです』

「……ちよつとs y l eならんでしょこれは」

爆炎の中からゆっくりと出てきた凶の目から、涙が溢れてくる。レ  
イジングハートを持つなのはが羨ましかった。帰ったら交渉しよう  
と思ひ、服についた埃を叩く。

「……そういえば、あのワン公は何処へ」

『マスター！ 後ろです』

「え                   ！？」

突然、背中に走る衝撃。吹き飛ぶ体。地面に叩きつけられ、バスケットボールのように何度もバウンドしながら跳んでいく体は、やがて木にぶつかって止まった。

激痛が体中に走り、意識が一瞬飛んだ。それでも何とか意識を保ち、やや霞んだ視界で前を見る。その先には、

「、……」

ボロボロになりながらも、その場に立ち続ける化け物が存在した。きつと、さっきの衝撃はこいつの攻撃なのだろう。爪はいくつか折れ、牙も砕けているが、それでも滲み出る殺意は止まらない。ゆっくりと身構え、走る準備をとる化け物。弱った獲物に対して、止めを刺す気なのだろう。

「……あー、イモータルソウル？ 万全の僕がこいつに勝てた確率と、今の僕がこいつに勝つ確率ってどんくらい？」

『両方とも1%を切っています』

「そつか……じゃあ、なのはちゃんが今から来てこいつをぶっ倒す確率は？」

『そうですね。98%で、なのは氏が勝ちます』

「そつかそつか  
じゃあ、あとは頑張っ  
てね、  
なのはちゃん」

同時に神社一帯が極彩色の膜に包まれる。結界だ。きつと、近くにユーノがいるのだろう。なら、

「デイバイイイイイイイイイイイイイイイ」

そのユーノから凶の危機を聞いた彼女が、じっとしているはずもな



## 少年と少女と初戦闘（後書き）

次回、早すぎる魔王降臨……みたいな感じ。  
まあ、簡単に言えば公開処刑だね。

## 少年と少女と恐怖の中で（前書き）

……なんだか、あっさりしている。

狂気が足りないような、戦闘シーンが足りないような、どっちも足りないような……。

まあ、とにかく。遅れて申し訳ありませんでした。

## 少年と少女と恐怖の中で

高町なのはにとって、破乃宮 凶は全てだった。

彼以外は望まず、彼の為に生きて、彼と共に死ぬ。なのはの頭の中にはいつもそれだけで、他の者など付け入る隙もない。友人も、家族も、国も、今自分が存在するこの世界さえも、なのはにはどうでもよく、いつでも捨てられるような、そんなものだった。

それが、自分だ。なのはは、凶と会った瞬間に、自分の生きる道を決定付けていた。

だから、ユーノから凶の危機を知らされた時、なのはの心は恐怖一色で染まり、使った事どころか、教えてもらってすらいらない探索魔法を、自身の才能だけで使用した。そして、凶の無事を知り、ホッと一息つき、同時に安心した自分を殺したくなりながら、人の眼を憚らずに空を駆けた。そして、見てしまった。

破乃宮 凶が、犬の様な化け物に吹き飛ばされているのを。

(……え?)

心が、一瞬空っぽになった。凶が死んだのではないかと錯覚して、なのはの心は、一度崩壊した。が、凶が生きてる事を知り、その心



(す…)

(  
:  
殺す  
)

(殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す)

144



「あああああああああああああああああ！！」

怒りに身を任せて、なのははレイジングハートを振るう。無意識のうち、魔力で強化されていたその一撃は、化け物の顎に命中し、その巨軀を宙に浮かせた。意識が途絶えた化け物に、なのははレイジングハートを構え、桜色の魔法陣を足元に浮かび上がらせた。

『Divine Shooter』

放たれた光弾が、浮き上がった化け物に命中し、更に上へと吹き飛

ばす。

「 !? 」

余りの痛みに化け物は目を覚まし、そして、自分の目の前まで接近していた少女を見て、さっきの恐怖を思い出した。

「 、 ..... 」

「 なに今更、目え覚ましてるのかなあああああああああああああああああああああ  
あああああああ!? 」

悲鳴を上げる前に、なのはがレイジングハートで化け物の頭を殴打し、落下する化け物の背中に向けて、

「 そんなに眠りたいなら..... 」

『 Divine 』

「 永遠に眠ればあああああああああああああああああああああ? 」

『 Buster 』

特大の砲撃を、再び放った。

「…………おっかねー」

特大の光の柱を眺めながら、凶は呟いた。確かになのはに魔法の才能があるとは知っていたし、今は過負荷マイナスとはいえ、元々は才能に溢れた特例スペシャルの中でも別段に高い才能を持った存在だ。が、まさかこれほどとは思っていなかったのだろう。凶は口をぽかんと開け、呆然としてる。なのはが見れば、卒倒しそうな表情だが、今のなのはは化け物を倒す事しか頭がない為、凶を見ていなかった。

（…………ほんっと、なのはちゃんは面白いなあ。一緒にいると、全く飽きない）

なのはと出会った日を思い出しながら、凶は小さく笑った。彼女と出会ってから、凶は退屈する事が一つもなかった。なのはは様々な事を引き起こすし、その度に凶も何かを壊す事ができた。なにより、なのはの行動も非常に面白く、凶の人生は前回よりも充実していた。

「…………さすがだなあ、なのはちゃん。まあ、だからこそ僕は…………」  
「凶！ 大丈夫！？」

「……おつ、やあユーノ君。メイドさんの胸は居心地よかったかい？」

「な、なに馬鹿なことを言ってるんだ君は！？」

冗談冗談、といいながら、メイドさんに抱かれて駆け寄ってきたユーノを宥める。それに溜息を吐いたユーノだが、すぐに我に返ると、慌てて凶に詰め寄った。

「それより、怪我は！？　ただでさえ君の魔法適正は低いんだから、バリアジャケットもまともに機能しなかったんじゃない？」

『その通りですユーノ様。先程マスターはバリアジャケットを紙のように破壊され、背部を爪で強打されました』

「ええっ！？」

「あゝあ、言っちゃったよこの子……」

イモータルソウルの発言に驚き、ユーノは驚いて凶の背中を見る。あの巨体にやられたのだ、相当な怪我を負っている筈だ。が、

「……あれ？」

『どうしました？』

「い、いや、強打されたって割には、怪我が軽いような……」

確かに、怪我は負っていた。が、その怪我はそこまで酷くはなく、猫が爪で引っかいたような痕しかない。凶は頭を軽く搔き、ユーノを頭の上に乗せて立ち上がる。

「まあ、これでも結構頻繁に壊されてきたからね、直るのも速いのだ」

「こ、壊されてきたって……」

「それはまた別の機会に。けど、やっぱり痛いもんは痛いし……メ

イドさん、お願い」

「承知いたしました」

メイドさんがゆっくりと、凶に触れる。途端、凶の背中への傷は綺麗さっぱりなくなっていた。それだけじゃない。最初に吹き飛ばされたときに負った傷も、爆発の時に負った火傷も、それどころか、バリアジャケットの破損さえなくなっていた。

「な、何が起きたんだ……？　まるで、傷がなかった事になったみたい……」

「メイドさんの力の一つさ。すべて なかったこと現実を虚構に。それがメイドさんのスキルの一つ、大嘘憑き。オールフイクション……ん？　手のひらハンドレットガントレットに孵孵したわけ？」

「理解したときは球磨川様の時でしたので、大嘘憑きで問題ないと思います」

そんな異常状況があった後でも平然と話をする2人を、ユーノには一瞬、おぞましいものに見えてしまい、すぐにその考えを恥じた。彼等は危険を冒してまで自分に協力してくれているのに、自分がこれでするんだ。疑念を振り払うように頭を振り、なのはを見る。

そこには、ボロボロになった化け物の顔を踏みつけている、なのはの姿があった。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」  
「、、……」

息を荒くしながらも自分を見下してるなのはを、化け物はただただ、恐怖の眼差しで見ている。

あれから、何度彼女の攻撃を受けていただろう？ 砲撃、追尾弾、打撃。様々な攻撃を休む暇なく受け続け、もう化け物の肉体と精神は限界に来ていた。



さっきの少年との戦いが馬鹿らしくなるほどの、圧倒的なまでの力。ただただ実感する、実力の差。体中に走る激痛。その全てが、化け物の恐怖を駆り立ててる。

「……怖い？」

「！？」

なのはの、ほんの一言にさえ、化け物は過剰に反応し、体を大きく震わせた。そんな化け物の顔から足を離し、なのははしゃがみ込んだ。

「分かるよ。うん、分かる。あなたの恐怖の感情が、私にたつくさん伝わってくるよ。けどね……」

立ち上がり、レイジングハートで頭を殴る。悲鳴を上げる余力すらないのか、化け物は苦痛に顔を歪めるだけで、それ以上の行動は取れない。そんな化け物の顔にレイジングハートを押し付ける。

「足りないの、それじゃあ。まーくんが受けた痛みとその程度の恐怖じゃあ、釣り合わないんだ。だから」

レイジングハートを離し、その過負荷マイナスを開放する。

同時に、化け物の中の恐怖が、膨れ上がる。本人の意思に関係なく、どんどん、どんどん、際限なく膨れ上がっていく。震えが止まらなくなり、それどころか、どんどん大きくなっていく。

「、………」

「あゝ、いい感じいい感じ。……それでいいんだよ。そうやって、恐怖のどん底の中であなただ……」

再び、レイジングハートを構える。展開される桜色の魔法陣。集束する光。なおも増していく恐怖。そして、恐怖で心が壊れる寸前で、

「まーくんに詫びながら、死んで」  
『D i v i n e B u s t e r』

桜色の光に、飲み込まれた。

## 少年と少女と恐怖の中で（後書き）

ふむ、やっぱり足りないなあ。まあ、そこまで重要な回じゃないから、いいのかも知れないけど……フェイト登場までには、もっと濃密なバトルが描けるようになりたい。

少年と少女と決着と……（前書き）

やっと投稿できたってばよ。……プロットを文章にするのって、ホント難しいんですね。

## 少年と少女と決着と……

デイベインバスターの閃光はそれから10秒ほど続き、やがて消失した。後に残ったのは僅かに痙攣し、虫の息となった化け物と、肩で息をしている高町なのは。その一部始終を見ていたユーノ、は空いた口が塞がらなかった。

「こ、これが……これが昨日魔法に触れた人の戦い？」

ユーノは嘗て様々な世界を回っていたため、様々な魔導師を見てきた。が、なのはの戦いはそのどれよりも凄まじいものだった。

確かに、才能はあった。だからこそユーノはなのはにレイジングハートを託し、ジュエルシードの搜索を依頼したのだ。だが、それを踏まえてもこれは異常だった。

「僕は……とんでもない人に魔法の力を託したのかもしれない……」

なのはの力に戦慄するユーノ。そんなユーノは次に目に入った光景を見て、慌ててなのはに駆け寄った。

「な、なのは！ 何しているんだ！？」

「何って……お仕置きの続きだけど？」

そう、なのはは虫の息となった化け物に、レイジングハートを向けていたのだ。幾らジュエルシードの力によって化け物と化していると言っても、中身はこの世界に存在する生物、原生生物だ。更に、なのはは生物に怪我をさせずショックのみを与える非殺傷設定というものを設定していない。その為、これ以上の攻撃は確実に原生生物を再起不能に、最悪殺害してしまうだろう。

「お仕置きって……これ以上やったら取り込まれた原生生物が……」  
「だから？」

「だ、だからって」

「え、だから何？」

心底不思議そうにユーノを見るなのは。それを見てユーノは理解する。

なのはは、生物の死を何とも思っていない、と。

「だってまーくん、あんなに怪我してたんだよ？ きつと、すつこく痛かったんだよ。なのに、その原因が何ともなっていないなんて、あつていいはずがないよ。うん」

「け、けど、殺すなんて絶対に駄目だよ！！」

「……ユーノくんさあ、何か偉そうな事言ってるけど」

じろりと、ユーノを見るなのは。その目は、蔑みに満ちていた。思わず、後退りするユーノ。そんなユーノを気にも留めず、なのはは言葉を紡いでいく。

「元凶が何ほざいてるの？」

「元……凶……？」

そつ、元凶と続ける。

「そもそも、ユーノ君がジュエルシードをこの世界に落とさなきゃ、こんな事にはならなかったんだよ？」

「そ、それは……」

それは、ユーノが常に考えていた事だった。

自分がこの世界にジュエルシードを落とした所為で、いや、そもそも自分が発掘した所為で、凶やなのは危険な目に会う事になってしまった。

「なのに、自分のミスの尻拭いを人にさせておいて、拳句の果てに指図するとか……ほんと、いい身分だね、ユーノ君」

「う、あ……」

言葉が、冷たい棘となってユーノの胸に突き刺さる。

そうだ。自分は、自分で世界を危険に晒しておいて、ジュエルシードの搜索を人に任せている。なのにも関わらず、こんな偉そうに指図している。

（なんて身勝手なんだ、僕は……）

自分の身勝手さに俯くユーノ。瞳から、滴が零れ落ちてくる。

なのははそんなユーノを見ると、再び化け物に向き直り、レイジングハートを構え直す。

『D i v i n e   b u s t e r .』

レイジングハートから機械音が響き、魔法陣が展開される。同時にレイジングハートの先端に桜色の光が灯り、その光は少しずつ大きくなっていく。

「じゃあ、続けよつか。……まーくんの痛みを、存分に味わってね」

そして、光の増大は止まり、

「デイベイン」

「はい、ストーッブ」

「えっ!？」

必殺の砲撃が放たれようとしたところで、なのはの横から聞き覚えのある声が聞こえた。横を見ると、そこにはさっきまで傷だらけだった自分の幼馴染の姿があった。

「ま、まーくん!？」

「話はまた後でね。イモータルソウル!」

『all light・sealing mode・set up』

イモータルソウルから放たれる電子音。同時に、イモータルソウル



が群青に光り、その形を変える。光が消えた後には凶の手にあったドライバーの姿はなく、代わりに、口の様な形をしたアームが姿を現した。

『stand by ready』

「ジュエルシード、シリアル16!!」

アームから群青の魔力が放たれ、化け物の中に吸い込まれるように入っていく。すると、化け物の中から群青色の光に包まれたジュエルシードが姿を現す。

「……封印!!」

『Sealing』

そして、それを噛み砕くかのように、アームで挟んだ。アームの間から群青の光が漏れ、やがて数秒ほどしてから消えた。そして、アームの口を開くとそこには、封印されたジュエルシードがあった。

「よつし。封印成功！ミスったらマジで役立たずだったね、僕」

『まあ、一人で戦えない辺りから役に立つかというと微みよ「やめて！これ以上は僕泣くよ！」失礼しました』

イモータルソウルを待機状態に戻し、足元を見る。するとそこには、さっきまでジュエルシードに取り込まれていた子犬がいた。凶はしやがんでその子犬の頭を軽く叩くと、再び立ち上がったのはを見る。なのはは、凶の突然の登場に、未だ困惑しているらしく、目を大きく見開いている。

「ま、まーくん？」

「なのはちゃん。気持ちは嬉しいんだけどさ、けど殺すのは良くな

いと思うよ」

「け、けど！ この犬、まーくんの事を」

「それはそれ。これはこれ。別に、このわんちゃんがやりたくてやったわけじゃないでしょ」

呆れたような凶の視線に、なのはは言葉を詰まらせた。何か言おうとしたが、これ以上なにか言うと凶に嫌われてしまうかもしれない。そこまで考えて、は、となのははある事を思いつき、慌てて凶の感情を探る。

凶から感じる感情は呆れだった。それが分かると、なのははホッと一息ついた。もし、この感情が自分への嫌悪になると思うと、恐怖で体が凍り付いてしまいそうになる。それだけは、何としても避けなければならぬ。なのはは「分かった？」と首を傾げる凶を見て、コクリと頷いた。

「はい、いい子いい子。それじゃあ、この調子でユーノ君にも謝ろうね」

「えっ……？」

凶の言葉に、今度はユーノが驚いた。そんなユーノに、凶は優しく笑いかける。

「別に、発掘した事は悪くないし、落としたのだって事故だったんだろ？ なら、ユーノ君が責任を感じる事はないさ」

「け、けどその所為で凶達が危険な目に……！」

「それこそ僕たちが自分で決めた事なんだから、ユーノ君が責任感じる必要ないよ。だからなのはちゃん、早く謝ろうね」

「う、うん……」

正直納得はしていないが、凶に嫌われるのは困るため、なのはは

渋々と頭を下げる。

「……ご、ごめんなさい。ユーノ君」

「……ううん。気にしないで。……凶」

「ん？」

良く出来ました、となのはの頭を撫でていた凶は（無論、撫でられたなのはの表情は蕩けきっていた）、ユーノに呼ばれて振り向く。そこには、泣き笑いを浮かべるユーノの姿があった。

「……ありがとう、凶。君に会えて、僕は本当に良かった」

「……どういたしまして」

微笑みながらしゃがみ込み、ユーノに人差し指を伸ばす。それをユーノは両手で掴み、二人で笑い合った。

……ちなみにその光景を見ていたメイドさんが、血溜まりの中で倒れていた事は、わりとどうでもいい事である。

「……じゃ、帰ろっか。あんまりここに長居する理由はないし」

「はいー！」

凶の声になのはが元気な声で答え、凶の腕に抱きついた。それを確認すると、ユーノを頭の上に乗せ、凶は歩き出す。いつの間にか復活したメイドさんも、その後に続く。

「……」

すると、突然凶が足を止め、くるりと反転する。その視線は、未だ

目を覚まさない子犬に向けられていた。

「まーくん、どうしたの？」

「……いや、何でもないよ」

なのはの声に軽く答え、再び歩き出す。

……この時、凶がおぞましい笑みを浮かべていた事は、後ろにいるメイドさんにしか分からなかった。

目を覚ますと同時に、子犬は尋常ではない恐怖に襲われた。

「!!!?」

別に、何か恐怖心を与えるものが近くにあるわけでもない。なのにも関わらず、恐怖は収まるどころか、更に増していく。

空を見る。恐怖が増す。

地面を見る。更に恐怖が増す。

神社を見る。恐怖が止まらない。

何を見ても恐怖心が消えない。いや、むしろ、何かを見るたびに、恐怖が増していく。

コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ、コワイ。空がコワイ。地面がコワイ。草木がコワイ。神社がコワイ。見るもの全てがコワイ。

誰か、誰か助けて。そんな子犬の脳裏に、自分の飼い主が浮かんだ。いつも自分を可愛がってくれる、大好きな飼い主。あの人の顔を見れば、恐怖が消えるかもしれない。限界を超えそうになる恐怖を振り切り、飼い主を探す子犬。そして、自分のすぐ近くにいるのを見つけて

更に、

恐怖が増した。

「

「！！」

そして、恐怖が限界を超え、その子犬は、息絶えた。

数分後、飼い主は目を覚まし、自分のペットの死を見て、悲しみに打ち震え、涙を流した。

少年と少女と決着と……（後書き）

一応言っておきます。k i n t o k i は別に犬が嫌いではありません。  
ん。

もしこれを読んでくださった読者様の中に犬が好きな方がいたら、  
申し訳ありません。

もう一度言います。k i n t o k i は別に犬が嫌いではありません。  
なので、別に犬に対しての悪意からこの話を作ったということはありません。

## 少年と少女といわゆる閑話（前書き）

2話と3話の間の話。別に続くわけじゃないんで次回は3話の話になります。

……それと、後書きにちょっと疑問というか質問が……。



## 少年と少女といわゆる閑話

破乃宮家は広い。

それは別に庭だけの話ではなく、家の中もかなり広く、稀に凶ですら迷う事がある。

そんな破乃宮家の地下3階にあるとある部屋。ぶっちゃけ3階もいらないのに凶の気まぐれによって作られたこの場所は

「……じゃあこれより、破乃宮家緊急会議を行います」

家族会議の場所として使われていた。ちなみに、使用回数は今回を含めて五回である。

ドーナツ状のテーブルに三人＋一匹が座っていた。凶、なのは、メイドさん、ユーノの四人(?)だ。ちなみに、テーブルは直径5mもあり、更になのはは凶にぴったりとくっ付いている為、スペースの無駄である。そして、そのテーブルの置いてあるこの部屋も、高さ10m、縦横の長さ20mと、果てしなく予算の無駄である。

「……えっと、メイドさん。質問してもいいですか？」

「どうぞ、ユーノ様」

おずおずと、小さな手を上げるユーノに、内心悶えながらメイドさんは頷き、質問を許可した。

「これ、何ですか？」

「説明しよう！！ 破乃宮家緊急会議とは、最近疑問に思った事や今日の夕飯の献立。明日の天気や世界の行く末について納得のいくまで語り合う会議の事である！！」

「……最後の一つだけ、無駄に壮大だね」

「まあ、僕たちが世界について語ったところで何にもならないけどね！！」

じゃあ何で語り合ったんだよ。そんな言葉が口から出そうになるのを堪え、とりあえずこの部屋のように途轍もなくどうでもいい会議である事を理解したユーノは、さっきまで抱いていた緊張感を頭の中から取り除いた。

「で、今日は何を話すのまーくん？」

「……なんで、なのはがいの？」

「私は近い未来に破乃宮なのはになるんだから、ここにいるのは当たり前なの！！」

「妄想乙！」

「そんな酷いまーくんも大好き！！」

ひしつ、抱き付いてくるなのはを引き剥がし、凶は両肘をテーブルにつけ、顔の辺りで両手を組む。俗に言うゲンドウポーズという奴である。しかし、凶の顔自体が童顔なため、どっかの指令のような迫力は出ない。どこからか持ってきたサングラスも、メイドさんを悶えさせる道具でしかない。凶もそれに気付いたらしくすぐにサン

グラスをそこらに投げ捨て、ゲンドウポーズを解いた。そして両手を机の上に置き、ようやく話を始める。

「うん、前回のあの犬っころの事なんだけどさ」

その言葉に、周りの空気が重くなった。ユーノは自分の罪悪感を抉られた時を思い出して俯き、なのははボロボロの凶を思い出して拳をきつく握り締める。メイドさんは特に変わりなく、いつもと同じ無表情で椅子に座っている。そして諸悪の根源である凶はへらへら笑いながら話を続ける。

「ほらあ、僕って資質ない上に魔力の最大使用量も少ないから、このまま戦ってたってあの犬の時の様にぼろ雑巾と化すのは目に見えてる」

「……だから？」

「うん。というわけで今回の議題は、『破乃宮 凶の強化プランを考えよう』です。というわけで外いこ外」

立ち上がり、メイドさんを引き連れて去っていく凶。なのははいつの間にかいなくなっている。まあ、彼女の事だから凶に着いて行ったのだろう。何時行っただかは分からないが。

一人残ったユーノは凶達の去って行った方向を見つめながら、ぽつりと呟いた。

「……リビングで良かったじゃん」

「というわけで。ユーノ、結界を張りたまえ!!」  
「はい」

言われたとおりに結界を張る。こういう時は無駄に反応せず素直に従ったほうがいいと、今までの経験からユーノは悟っていた。……若干、つまらなそうな顔をしている凶は、見なかった事にする。

「さて。これからどうすればいいかな？」

「……他の魔法を覚えるにしたって、凶の資質じゃあ覚えるのに相当の時間がかかるだろうし」

「きっぱり言うねえ」

「なら、今使える魔法の練度を上げるしかない、かな？」

「じゃあ、それでいくか」

元よりユーノ以外に魔法に詳しい者などいないため、必然的にユーノの意見を採用するしかないのだが。早速イモータルソウルを展開し、白い制服基調のバリアジャケットを展開する。

「じゃあまず、こいつだ！」

『Flight Wing』

群青の翼が背中が生え、凶の体が浮き上がる。何気に、スマッシュ

ドライバーよりもすなりと使える。……犬の時に使えばよかったと、凶は少しだけ後悔した。

「うん、問題ないみたいだ。……凶、どうしたの？」

「べつにー。じゃあ、次行こうか」

『all right・smash driver』

肘から伸びるドライバーに群青の光が灯る。それを確認すると、凶はなのはを見る。すると、いつの間にかレイジングハートを手に持っていたのはが、足元に魔法陣を展開する。同時になのはの近くに浮かび上がる桃色の光球。デイバインシューターだ。そしてレイジングハートを凶に向け、

「シュート！」

デイバインシューターを発射する。不規則な動きで近付いてくるデイバインシューターに、イモータルソウルを構えて迎撃の体制を取る。

「よし、行くか。イモータルソウル、指示お願いね！」

『了解。まず右から来ます』

イモータルソウルの言うとおり、右から迫ってくるデイバインシューターを回避し、スマッシュドライバーを叩きつける。デイバインシューターは小さな爆煙をあげて消滅する。

「おー、いったいた」

『油断しないでください。次は後ろからです』

「まじで？ うおっとー！」

宙返りの要領で回避し、再び打撃。が、反応が遅かった所為か間に合わず、虚しく空を斬るだけだった。

「あつぶねえ……」

『誘導系の魔法相手だと今の様な状況は少なくありません。常に回到りに気を配ってください』

「おkおk」

またやるんだろっな、コイツ

心中（機械に心があるかは不明だが）で悪態をつき、すぐに指示を再開した。

「イモータルソウルって凄いね。私のデイベインシューター、全部見抜かれちゃってる」

『……そうですね』

「あれ、もしかして拗ねてる？」

『……別に』

軽口を叩きながらも魔法弾を操作する2人を見た後、ユーノは空中にいる凶を見る。危なげながらも、イモータルソウルの指示により何とか攻撃を回避している凶を見て、ほっと一息ついた。

「うん。イモータルソウルを取ったのが凶でよかったよ」

ユーノはふと、イモータルソウルを手に入れたときの事を思い出す。とある次元世界行った時の事だ。そこは嘗て戦争があった場所らしく、崩れた建物などが数多くあった。その中には古い遺跡もあったため、その調査の為に来ていたのだ。

が、結局大した発見もなく、落胆しながら帰ろうとしていたとき、近くの建物の跡から光るものを発見した。それが、レイジングハートと、イモータルソウルだった。

その後調べた話によると、その家にはデバイスの製作を営む兄弟が住んでいたらしい。兄の方は管理局から勧誘がくるほどの職人だったらしいが、弟の方は腕は悪くないが、あまりにも優秀すぎる兄の所為で評価されなかったらしい。その為、弟は兄を妬み、いつか兄を超えようとしていたらしい。

そんなある日だった。彼の兄はとあるデバイスを完成させた。それは、彼が今までデバイスの中でも特に完成度の高いデバイスだった。それを知った弟は夜に兄の部屋へと忍び込み、そのデバイスのデータを手に入れ、それを参考に、そのデバイスを遥かに超える性能を持つデバイスを作り上げたらしい。……まあ結局、その一週間後に戦争が起き、2人は戦火に巻き込まれて死亡。この噂も、弟が酒に酔った勢いで話していたのを聞いた隣人のものであったため、真偽のほどは定かではないが。

そんな2人の作ったデバイスこそが、レイジングハートとイモータルソウルだ。

レイジングハートは持ち主の全能力をサポートでき、更に、戦闘を重ねているうちに持ち主に合わせた性質のデバイスへと変化する機能を持っていた。そしてイモータルソウルは、云わばレイジングハートの上位互換。レイジングハートの全機能を遥かに上回り、たとえランクCの魔導師でも、Aランク魔導師と互角に渡り合わせるほどの性能を持っていた。

再び、空を見る。何時の間に残り一つとなっていたデイベインシューターを、凶が叩き落しているのが見えた。その光景を見て、改めてイモータルソウルの持ち主が凶であった事を喜んだ。



「粉碎、玉砕、大喝采イイイイイイイイイイイイイイイイ  
！！」

『マスター。テンション上がりっぱなしなのはよろしいのですが、そろそろ第二波が来ますよ』

「ひょ？」

ちらりと、下を向く。そこには、何やら桜色の魔力をチャージしているなのは姿が見えた。前回の戦いを見ていたから分かる。あの脅威の砲撃、デイベインバスターだ。

「……あれか、なのはちゃんは僕を殺す気なのか」

『それよりも、マスターの看病を口実にあんな事やこんな事をしようとしているのではないでしょうか』

「な、なんだってー！……すつごいありえそう」

そんな話を話している間に、デイベインバスターのチャージが完了。ニコリと笑みを浮かべながら、凶にレイジングハートを向ける。

「非殺傷だし大丈夫だよまーくん！もし怪我しちゃったら一生面倒見るから」

「イモータルソウルってホント優秀だね！」

『恐縮です』

『壊れるおおおおおおおおお！！マスターを誘惑する雌デバイスウウウウウウウウウウウウウウ！！』

「めっちゃレイハさんがキレてる件について」

『私の性能に嫉妬してるんですよ。いやはや、これだから格下は面倒です』

『殺おおおおおおおおおおおおおおおおす！！』

何となく、桜色に黒が混じった気がする。そんなこんなでチャージ



けさ！」

「最悪じゃないか……」

結局、凶はあの後気絶し、が、一分もしないうちに覚醒した。その顔にはダメージの色はない。……ちなみに、なのはお仕置きによつて現在寝込んでいある。良く分からないが、メイドさん曰く「風邪をこじらせた」との事。

「やつぱ過<sup>マイナス</sup>負荷じゃきついかなあ……」

「そ、そんな事ないよ！ 凶だって頑張ってるんだ！ きつといつか……」

「だってさ。魔力資質だって少ないし。唯一の攻撃魔法は大した威力無し。裏技のバーストは自爆。寧ろ僕の方がダメージでかいし。となると、満足に出来るのは飛行となんか目が増える奴だけだし……」

「ちよつとストップ」

今、彼は何と言つたのだろうか？

「め、目ってなに？」

「いやあ、ちよつと前に遊んでたらさ。何かこう、遠隔操作できる目みたいな魔法使えてね。けど戦闘には使えそうにないからいらな」と

「いやいやいやいや。そ、それって、まさかエリアサーチ？」

『はい。その時使った魔法は、エリアサーチに間違いありません』

思わず、絶句してしまった。

エリアサーチとは、探索魔法と呼ばれる魔法の一つで、サーチャーという魔力で作り出した端末を飛ばし、そこから得られた視覚情報から、サーチャーのある範囲を視認する事が出来る。要するに、目を複数作り出すことの出来る

魔法だ。

「……まさか」

「どつたの？ フェレット帝国の糸口でも見えた？」

「凶！ 今から僕の言ったとおりにやってみて！！」

「イモータルソウル。ユーノ君がくれたよ……」

『反抗期ですよ。大丈夫。少し経てば、またあの優しいユーノ様に』

「い・い・か・ら！！」

「『はい』」

「……何てこつた」

あれから、とりあえずユーノの知る限りの探索魔法を教えたところ、見事に使いこなす事に成功した。それも、並みの魔導師のレベルではない。一流の魔導師並のレベルだ。

更に、イモータルソウルの機能をフルに使った結果、

「まさか、この町一つを、軽く探索できるほどなんて……」

「えっ、あのラーメン屋潰れるの！？ 結構あのグロテスクな味が好みだったのに……」

現在、サーチャーをフルに使って海鳴市を探索している。……勿論、疚しい事には使っていない。そんな事をすれば、なのはの怒りを買うのは目に見えているからだ。

それにしても、こんな意外な魔法の才能があるとは……。ユーノが未だ夢を見ているような気分で凶を見ていると、

「……あれ？」

「どうしたの？」

「いや、今サーチャーが何か見つけたような……お、ジュエルシード見つけ」

「ええっ！？」

驚きに声を上げるユーノ。当たり前だ。前のを手に入れた時からさほど時間を置かずに、更に暴走前のジュエルシードを手に入れたんだ。これを見逃していいはずはない。

「ど、どこ！？ 誰かが拾う前に、急いで取りに行かないとー！」

「んつとねえ……おお、学校の近くじゃん。ラッキー」

「急いで取りに行こうー！」

「おkおk。じゃ、メイドさん行ってきまーす。なのはちゃんよろしくー」

家に手を振り、ユーノが肩に乗ったのを確認し、凶は家を後にした。

そしてその数分後、イモータルソウルには二つ目のジュエルシードが収納された。

これが後に、管理局最高の探索魔導師と謳われた魔導師の誕生の間であった。

## 少年と少女といわゆる閑話（後書き）

ちょっと前に、にじファンで僕と同じくリリなのとめだかのクロスオーバーの小説が新しくでていたのを知って、興味があつたので読ませていただいたのですが……気のせいならいいのですが、何となくこの小説に似ている気がしなくもないのですが……。

気のせいだったらその作者様に本当にもうしわけがないのですが、気のせいじゃなかったら……どうすればいいのでしょうか？

## 少年と少女とサッカー観戦（前書き）

お待たせしました。久しぶりの投稿です。

ちなみに、今回は若干のアンチ描写のようなものがあります。苦手な方は今すぐ読むのをお止めください。

ちょっと訂正しました。『』の深淵様、ご指摘ありがとうございます。



## 少年と少女とサッカー観戦

夜の私立聖祥大付属小学校。そこで、そのジュエルシードは自らの力を解放しようとしていた。淡かった光が徐々に強まっていく。そして、その光が最高潮に達し、

「残念。君の出番はないよ」

『stand by ready』

「ジュエルシード、シリアル20」

解き放たれる寸前で、突如現れた群青色の閃光によって中断された。群青の光に包まれ、ゆつくりと浮かび上がるジュエルシード。それを待ち受けていたかのように、右腕にアームを装備した少年

破乃宮 凶が現れ、

「封印！」

『sealing』

アームでジュエルシードを挟み込む。そして光が消え、ゆつくりとアームを開く。そこには封印されたジュエルシードがあった。

「よし、間に合った！」

封印できたことを確認し、ガッツポーズをとる。その近くには群青の光を放つ球体が浮かんでいる。これこそ、凶の唯一得意とする探索魔法の要、サーチャーだ。凶は毎日1時間置きにこのサーチャーを飛ばし、海鳴市中を探索している。今回はこのサーチャーで発動前のジュエルシードを発見し、封印することが出来たのだ。ちなみに、この探索魔法により凶は、今回を合わせて新しく見つけたジュ

エルシード二つを、なんと発動前に封印しているのだ。この結果には、ユーノも思わずガッツポーズを取ってしまった。……ちなみに、メイドさんはそれを見て鼻血を吹きながら倒れた。

『ガチでジュエルシードと戦ったら敗北は必須でしたからね。良かったですねマスター』

「……もしかして、イモータルソウルって僕のこと嫌い？」

『いえ、大好きですよマスター』

「……それはそれで恥ずかしいなあ」

恥ずかしそうに頭を掻く……イモータルソウルで。その様子を見て、なんとなくメイドさんのユーノを可愛がる気持ちを理解したイモータルソウルだった。

が、そんな微笑ましい空気は、横から放たれたおぞましい気配によって消し飛んだ。

「あー……なんだか生命の危機に瀕している気が……」

『死ぬ時は一緒ですよマスター』

「死ぬ事は確定してるんですね、わかります」

「何分かり合ってるわけ？」

ぎぎぎ、と油が切れたロボットののような動きで横を見る。そこには、レイジングハートを構えた我らが高町なのは様の姿があった。桃色の光がレイジングハートに収束されている辺り、砲撃を撃つ気満々だ。

「落ち着くんだったのはちゃん。一時の感情に身を任せてはいけない」「私をほっというジュエルシード探しに行つて、やっと見つけたと思つたらいちやいちゃいちゃいちゃ……幾らまーくん大好きな私も、これは許容できないよ……」

「いちゃいちゃって……別に僕とイモータルソウルはそんな気は……」

『さあマスター！　あなたの大切な人を奪おうとする泥棒猫に天誅を！』

「『お前が原因か！』」

とりあえずレイジングハートは後でシメる事にして、とりあえずなのはを説得しなければ。必死で平常心を保ち、なのはに話しかける。

「なのはちゃん。僕は「デীবバーイーン」あ、駄目だこりゃ」  
「バスタアアアアアアアアアアアアアアアア！」

その日、私立聖祥大付属小学校に、桜色の光の柱が立った。

ボスツという音を立てて、なのははベッドにダイブした。その表情は布団に埋もれていて見えないが、布団を何度も殴っている辺り怒っているのだろう。

「まーくんの馬鹿！ 女泣かせ！ 大好き！！」

最後の方を特に強調させながら、寝返りを打つ。頬を膨らませて天井を睨んでいるその姿は、さつき特大の砲撃を撃った人と同じ人間とは思えない。

「私という婚約者がいるのに、他の人（？）とあんなに楽しそうに……おまけに、あ、あんな照れた顔なんて、私だつて殆ど見た事ないのにいいいいけどすつごく萌えた!!」

怒りながらにやけるといふ器用なことをして、溜息を吐く。ごろりと転がり横を向き、携帯電話を取り出す。謝罪のメールでも来ていれば、と思ったのだが、メールの着信はない。再び溜息を吐いて、携帯をしまった。

「……もしかしてまーくん、怒ってるのかなあ？ どうしよう、明日会った時に無視されたら、感情を見て嫌われてたら……」

嫌われる。その言葉を吐き出した瞬間、なのはの顔が真っ青になった。体が凍りついたように冷たくなり、震えが止まらなくなる。がちがちと歯を鳴らし、瞳から涙が溢れ出る。

[illegible]

その言葉しか知らないかのように、心中で呪詛の如く呟き続ける。だが震えは止まることなく、なのはは自分の体を抱きしめる。そし

て、堪えるようにギュツと強く目を瞑った。

「なのは、起きてるか？」

そんな時だった。ドアがノックされ、なのはの父、高町士郎の声が聞こえたのは。

突然の事態に大きく体を震わせる。少ししてから、未だ震える体を抑えながら「なに？」と返す。

「いや、大した事じゃないんだけどな。父さんがサッカーチームの監督やつてるの知ってるだろ？」

そういえば、前にそんな事を言っていた気がする。記憶を掘り起こしていた為返事が出来なかったが、その沈黙を肯定と取ったらしく、ドアの向こうにいる士郎は続けた。

「そのチームの試合が明日あるんだが、見にくる気はないか？」

そんな事を一々聞きに来るな。現在機嫌の悪いなのははその言葉に苛立ちを覚え、拒否しようとして、

「彼、破乃宮君、だったか？ 彼も連れていいからさ」

凶の名が出た途端、ピタリと動きを止めた。これはもしかしたら、仲直りのチャンスではないのだろうか？ 否、それだけではない。

（これは、まーくんともっと親密になるチャンス！！）

なのはの頭の中で、妄想が膨らんでいく……。

その日、なのはと凶は中睦まじくサッカーの観戦をしていた。

『まーくん』

『ん？』

『ただ読んでみただけ』

『こいつ』

『きゃ〜！』

そんな、誰がどう見てもカップルにしか見えない二人。

が、そんな幸せな二人の方へと、選手のミスでボールが飛んできた。

『きゃあ！』

『なのはちゃん、危ない！！』

それに凶がいち早く気づいて、体を張って止めた。慌てて駆け寄ってくる選手やギャラリイ達。

『なのはちゃん、怪我はない？』

『だ、大丈夫。けど、まーくんこそ大丈夫なの？』

『全然大丈夫。それよりも、僕の大切ななのはちゃんが怪我しなくて良かったよ』

『ま、まーくん……』

キラリと齒を光らせて笑う凶を、潤んだ瞳で見つめるなのは。周りのギャラリも、そんな仲睦まじい二人を祝福する。

『なのはちゃん……』

『まーくん……』

そんな祝福の中で、二人は手を取り合い、ゆっくりと顔を近づけ…、

（……す、素晴らしいの……これはイケル！！）

「い、行きますー！」

「（行きます？）そうか、分かった。じゃあ明日、寝坊するんじゃないぞ」

士郎の気配が離れていくのを感じ、なのは再びベッドに寝転がる。その顔は笑みで蕩けきっている。

「ああ、明日が楽しみ！ まーくん大好き！！」

キヤーキヤー騒ぎながらベッドの上を転がるなのは。隣の家の人から苦情が来ているのにも気づかない。それほどまでに、妄想の世界に入り込んでいるのだろう。

だからこそ、気づかなかった。さっきの士郎の感情に。あの、決意という名の感情に。

「……なんで、こうなるの?」

「なにへこたれてんのよアンタ？ あっ、ほらそこ！ なに腑抜け



たディフェンスやってんのよ!!」

隣で叫んでいるアリサを恨めしそうに睨み、なのはは溜息を吐いた。あの後凶にメールを送り、了解の返信を貰った（ちなみにそのメールには謝罪の言葉も書かれていて、なのはは号泣していた）なのは、凶を迎えに行った。が、そこから問題だった。

『あ、なのはじゃない。何やってんの?』

偶然にも、アリサとすずかと遭遇してしまったのだ。このままでは二人きりになれなくなる。何とか誤魔化そうとしたが、更に間の悪いことに、なのはを迎えに行こうとしていた凶が来てしまったのだ。そして、今日のサッカーの試合の事を包み隠さず話してしまった。となると、当然、

『ふーん。ねえ、それ私たちも行っている?』

『おく』

こうなってしまう。というわけで、なのはの凶と二人きりという目論見は、見事に砕け散った。

空気の読めるすずかは何度も謝ってはくれたのだが、それでもなのはの機嫌は直らない。

（何で出てくんのかなあ、二人とも。少しは空気読んでよ。やっとまーくんといい感じになれると思ったのに……?）

そこまで考えて、気づいた。さつきから、凶がいない事に。

その頃、凶は士郎の隣に座っていた。少し前、なのはが考え事をしているときに呼ばれたのだ。

「……さて、そういえばこれが初対面だったね。僕がなのはの父親の高町士郎だ。よろしく」

「これはどうもご丁寧に。まあ、多分知ってるだろうけど、破乃宮凶です。こちらこそよろしくお願いします」

それだけ返すと、凶は再びサッカーグラウンドに目を戻す。まるで興味がないとでもいたげに。が、士郎は特に何も言わず、凶と同じくサッカーグラウンドを見る。

「……なのはが今までお世話になってきたみたいだね」

「べつつにー。あの子めちゃくちゃ面白いんで、毎日が楽しいですよ」

「そう、か……」

そこで再び、会話は途切れる。が、特に凶は気にすることもなく、サッカーを楽しそうに見ている。

「……なのはは、家で殆ど話さないんだ」  
「？」

突然の土郎の言葉に、凶は視線を土郎に向ける。土郎は真剣な顔で自分を見ていた。

「それだけじゃない。誰とも目も合わせないし、話しかけても空返事。唯一話す事と言えば、君の事だけ」

「……」

「昔は、違ったんだ。昔は、沢山笑って、沢山話して、沢山泣いて……それが、君と出会って、全て変わってしまった」

少しずつ語気が強まっていく。が、凶は何も言わず、ただそれを聞いていた。

「無論、その原因の一端は怪我をした僕にあるんだろう。けど、それでも！僕は君を許せない！なのはをあんな風に変えてしまった君を、許せない！……だから、頼む」

強かった語気を緩め、凶に向かってゆっくりと頭を下げる。

「もうなのはと、会わないでくれ。これ以上なのはを、変えないでくれ」

言った。言い切った。達成感が土郎を包む。後は、凶の言葉だけだった。

数秒の沈黙の後、凶は、言った。

「あ、それで終わり？」

まるで、友達と馬鹿話をしていたように、あっさりと。

「なっ……」

「いやー、あんだけ溜めるからもう少しちゃんとした話だと思ったのに、聞いて損した」

「き、聞いてなかったのか！？ 君の所為でなのはは」  
「っーかさ」

士郎の言葉を遮る。決して強く言っていないのにも関わらず、それだけで士郎は止まってしまった。

「育児放棄してた人たちに、変わったただのとか言う権利ってあるんですか？」

「い、育児放棄なんて」

「え、高町家って家族みんなが娘を無視したりする事を育児放棄っていうんですか？ うっわー、凄いな高町家」

「そ、それは……」

「言い返せないでしょ？」

にこり、と優しい笑みを浮かべる凶。が、その笑みは士郎には、酷くおぞましいものに見えた。

「大体、もし僕がなのはちゃんに声かけなかったら、あの子どうなってたと思う？ ずっと自分の感情を押し殺して、迷惑かけないよ

うにしようとかいう固定観念に囚われて、ずっと人の気を伺うような人間になってるとこだったんだよ？」

「そ、そんな事はない！」

「あるから言ってるんですよつと。……それより、さっきからあーだこーだと言ってるけどさ」

言葉を一端止め、士郎に少し近づく。それだけで鳥肌が立ち、背筋が凍りつく。

「ぶつちやけ、元凶つてあんたじゃん」

「……僕が、元凶？」

「だってそうでしょ？ 家族がいるのになんか危ない仕事とかやって、それで勝手に怪我して、それで家族崩壊寸前まで追い込んで、これが元凶と言わなくて何ていえばいいのさ？」

言葉が、棘のように突き刺さる。

「大体、あんたつて夫なんでしょ？ 父親なんでしょ？ 所謂大黒柱つてやつなんでしょ？ なのにそんな仕事をやってるとか、普通の神経じゃ出来ないでしょ。いやあ、まあお金を稼ぐためだったんだろつけど、それにしたつて他にもいくらかでも方法はあったわけだし、わざわざそんな命を懸ける必要は……あ、もしかしてあれ？ 命を懸けてお金を稼ぐ俺かつこいいみたいな？ うつわー、恥つずかしいー。親の風上にもおけねえー」

「あ、うあ……」

圧倒される。何度も死線を潜り抜け、数多の強敵を打ち倒してきた士郎が、こんな、娘と同じ年の子供に、圧倒されている。

「まあ、長々と話してたけどさ。なのはちゃんがああなつちやつた

のは、あんたが全部の元凶なわけで。だから、さ

ゆっくりと、顔を士郎の耳元に寄せる。

「……今更親の顔してんじゃねえよ、屑野郎」

それだけ言い残し、凶はその場から立ち去っていった。

……後に残ったのは、抜け殻のように呆然として座り込んでいる、士郎だけだった。

「あつ、まーくんどこいつてたの？」

「士郎さんとお話。思わずテンションあがっちゃって、ちょっと長く話しちゃった」

ようやく戻ってきた凶に、なのはは頬を膨らませる。が、すぐに表情を笑顔に戻し、隣に座るように促した。

（よし……少し計画とは違うけど、まあ概ねオッケー。私の計画に支障はない）

凶の腕に抱きつきながら、なのはは邪悪に笑う。その顔は既にヒロインなどではない。ラスボス級の悪役顔だ。グラウンドを見ると、一人の選手がボールを貰っていた。

今だ。

「君さっきから外しすぎ〜！。もうちょっと練習すれば〜！？ あつ、そっかそれが限界なんだ。ごめんね〜！！」

その選手に向かって、見事な罵声を浴びせた。隣の凶も「うわあ」とでも言いたげな顔をしている。

当然、言われた選手は平気なわけが無い。表情を怒りの色に染め上げ、なのはを睨み付ける。……それこそが、なのはの狙っていた瞬間だった。

すぐにその選手に『歪ディストーションだ三角形』を発動。その怒りを殺意レベルにまで増幅した。

そして、怒りの籠ったボールが、なのは目掛けて飛んできた。

（キタ                      ！！）

歓喜するなのは。そして、なのはにボールは迫っていき、

「なのはちゃん、危ない！！」

が、さすががギリギリでボールを弾いた為、事なきを得た。

「…………え？」

「な、なのはちゃん！ 怪我はない？」

「いや、相変わらずすずかちゃんの運動神経って凄いね。僕、ボールが全然見えなかったのに」

（し、しまったああああああ！！ まーくんの運動神経の無さを考慮してなかったの！！）

完全に、なのはの失策だった。頭を抱え、下を向く。すずかが何やら言っているが、なのはには聞こえない。

「…………なんで、こんな事に」

なのははそのまま、力尽きたように凶の膝に倒れこんだ。その目からは、涙が溢れて止まらなかったとか。



「ユーノ様、お味はいかがですか？」

「おいしいですよメイドさん。あつ、そのビスケット取ってください」

「はい、どうぞ」

ちなみに、今回で番の無かったユーノはメイドさんとお菓子を食べていて、それを見ていたメイドさんは頻繁に鼻をティッシュで拭いていたという。

## 少年と少女とサッカー観戦（後書き）

では、今日はここまでです。

次回はジュエルシード発動と、スーパーまーくんタイムになるかと思われます。では、次回もよろしく願いします。

## 少年と少女と破壊の狂気（前書き）

スーパーマーくんタイム。今回はホントそんな感じ。

なんとなく影の薄かった気がするマーくんが、今回は結構頑張るかも……？

## 少年と少女と破壊の狂気

試合の結果は、士郎率いる『翠屋JFC』の敗北だった。というのも、前半の途中から士郎の指示が途絶えてしまい、それによりチームは混乱。そして、後半から復帰した士郎の指示もどこか気が抜けていて、結局、チームの力を発揮し切れなかった形で敗北してしまったのだ。

そして現在、彼らは士郎の経営している『翠屋』で反省会をしているらしい。……なぜ、らしいと言ったのかと言うと、

「まーくん、何かいい事あった？」

「あったあった超あった。それもとびっきりのがね」

彼らは今、『翠屋』にいないからだ。アリサにさんざん文句を言われたものの、流石に一家の大黒柱の心を折った後に『翠屋』にいくのはまずいと思い、適当に理由をつけて現在なのはとデート（なのは曰く）中である。凶は珍しく口笛を吹きそうな程に上機嫌で、なのはは凶の喜びを感じる事ができ、凶の腕に抱きついてご満悦中だ。

「んふふ」

「どうしたの？ そんな温めたとるチーズみたいな顔して」

「だってだってだって！ まーちゃんとデートなんて久しぶりなんだもん。最近はジュエルシード探して忙しくて、全然デートできてなかったし……ハッ！ これは関係を次のステップへと進めるチャンス！！」

「はっはっは。寝言は寝て言いたまえ」

「何か偉そうになってる！ けどそんなまーくんも大好き！！」

すでにテンプレと化してきたやり取り。何も知らない人たちはそん

な2人に思わず微笑を浮かべてしまった。

そのまま2人は町を上機嫌で歩く。本当に幸せそうだ。

⌈  
⋮  
⌋

「いっ、いっねって……」

そんな2人を、あのジュエルシードの感覚が襲った。

同時に、町の至る所から巨大な蔓が伸びてくる。突然の事態に逃げ惑う人々。その様子を暫くぼんやりと眺め、

「……デートの時間は終わり、らしいね」

「……あんのクソジュエルシートオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオ！」

なのはの咆哮が、町に響き渡った。

メイドさんに抱えられたユーノがやってくる、数分前の出来事だった。

「うわーお」

ビルの屋上にやってきた凶が発した第一声が、これだ。ユーノと合流し、とりあえず状況を把握しようということ近く、ビルに上った凶達を待っていたのが、町の至る所から巨大な樹が生えているという光景だった。

「すっげー。自然保護団体が泣いて喜びそうだねコレ」

「そ、そんな事言ってる場合じゃ……」

「分かってるって。……んじゃ、そろそろやりますか」

イモータルソウルを起動し、足元に魔方陣を展開する。同時に凶の周りに展開される無数の魔力球。凶の十八番、サーチャーだ。それを確認するとイモータルソウルを前に向け、

「ほら、いっておいで」

イモータルソウルを振るった。同時に町の至る所に飛んでいくサーチャー。そして、そのサーチャーから得た視覚情報が、凶の頭の中に流れ込んでくる。

「……んー」



『怒って感情を剥き出しにしてるマスターハアハア』

ユーノがぐりと肩を落としている間に、レイジングハートのチャージが終了した。そして、既に狂気レベルにまで達している怒りを籠めたなのはの瞳が、ジュエルシード……正確には、ジュエルシードの近くにいる少年少女を睨む。

「ま、凶！ 止める方法は」

「ですよー」

放たれる桜色の暴力。近くにある蔓を吹き飛ばしながら直進し

「えっ！？」

「う、うん！？」

「ふざけてないで避けようよ！」



「……ユーノ、あの光るの何？」

「多分、ジュエルシールドが作った魔力防壁だと思う。近づいてきたものに対して自動的に展開されて、宿主を守るシステムになってるんだと思う」

「じゃあ、私のデイベインバスターもあれが？」

「多分ね。それで、防壁が発動したらあの蔓が迎撃する。すぐやめたって事は、あくまでカウンター目的ってことだと思う」

「としても、その効果は大きい。デイベインバスターを弾く防壁に、自動迎撃機能。なのは以上の攻撃力を持たない凶達にとっては、最大の強敵だ。」

「けど、今までのジュエルシールドって、こんなに高性能じゃなかったよね？　なのに、なんで……」

「多分、人間が発動させたからだと思う。ジュエルシールドは願いの強さによってその力も大きく変わる。だから、思考が他の生物よりもはつきりしてる人間が使えば、ジュエルシールドは更に強大な力を発揮するんだ」

「……おまけに、今回は持ち主が2人、みたいだからね。尚更力も上がるだろうね」

凶は再びサーチャーを起動し、さっきの防壁が起動したギリギリのところまで近づけ、囚われている2人を見る。抱き合い、眠っている二人。きつとお互いに淡い恋心が芽生えていて、二人でいるだけで幸せになれるのだろう。そんな二人を見て、

（ああ

壊したいなあ）

どうしようもないほどの、強烈な欲望が湧き上がった。

「……僕、ちよつくら行つて来るわ」

ユーノをなのはに渡し、ゆつくりと前に出る。それに少しの間呆然としていた二人だが、状況を理解すると慌てだした。

「ま、凶！ 何言つてるのさ！？ あんまり言いたくないけど、君の魔導師としての実力はなのはより圧倒的に劣ってるんだよ？ なのに、君一人じゃ……」

「そうだよまーくん！ もしかしたら死んじやうかも」

「大丈夫大丈夫。とりあえずあの防壁ぶつ壊すから、そんな時に来る蔓はよろしくね」

それだけ言うと、凶は群青の翼を広げて空を駆ける。止まる気配の無いその様子に、何とかして止めてもらおうとユーノはなのはを見る。が、

「……そっか、『壊れた壊し屋』<sup>デストロイア</sup>。あれならあの防壁を……うん、よし！」

何故か、一人で納得していた。再び呆然とするユーノ。あの凶命のなのはが凶のピンチに対してこんな冷静でいるとは思わなかったのだ。そんなユーノを放っておいて、なのははレイジングハートを構える。

「分かったよまーくん！ 絶対を守るから任せてねー！！」

腕をブンブン振りながら叫ぶなのは。それに遠めで良く分からないが、手を振って答える凶。そんな二人を見比べて、ユーノは不安そうな眼をしていた。

（ああ……いいないないなあ！ まさか一日で三人もぶっ壊せるなんて、ホント魔法様々だねえ！！）

心中で歓喜の声を上げながら、凶は速度を上げる。その瞳には普段は見せない、いや、隠している狂気が見えていた。

（ここんとこ、全然壊せてなかったし……）

「久しぶりに、派手にぶっ壊してもいいよねえ！？」

咆哮と同時に、突然目の前が光で見えなくなり、何かに弾かれた。

防壁だ。そう判断している間に凶の左右から蔓が伸び、凶を襲う。が、その両方に何かが当たり爆発した。爆炎の色は桜色。恐らく、なのはの射撃魔法だろう。

「……ホント、君と会えてよかったよ。なのはちゃん!」

爆発で蔓の動きが止まっている隙に、防壁に近づく。そして、その手で触れた時……防壁がガラスのように砕け散り、一瞬だけ煌めいて消えた。多分ユーノは驚いてるだろうと思いつながら、再び加速する。その後、後ろから爆音が響いてきたから、恐らくなのはのデイベインバスターが蔓を吹き飛ばしたのだろう。そして、遂に二人がいる樹の真上に到着した。

「おーけーおーけー。ここまで予定通り……イモータルソウル、羽消して」

『宜しいのですか?』

「うん。後は壊すだけだから」

『……Flight wing・Release.』

電子音の後、群青の翼が掻き消えた。自分の頼みを聞いてくれた相棒を一撫でし、樹の上に着地する。

「さあて、と……」

ゆっくりと肩膝を曲げ、手を木の枝に添える。そして、三日月のような歪んだ笑みを浮かべ、

「行くよ……『壊れた壊し屋<sup>デストロイア</sup>』」

呟くと同時に、それまで町を侵食していた全ての蔓の動きが、止ま

った。そして、ゆつくりと蔓が、枝が、葉が、大樹が、その形を保  
てずに崩壊していく。そしてその崩壊はこの樹まで進み 破  
壊した。

「よし。それじゃ、派手にぶっ壊した事だし……そろそろ封印、行  
きますか」

『Flight wing……sealing mode・se  
t up』

封印形態となったイモータルソウルを構え、飛翔する。先に二人の  
両手を掴み、アームをジュエルシードに向ける

『Stand by ready』

「そうだ、今回は特殊バージョンで行こう」

『all light』

凶の言葉に答え、イモータルソウルが群青の光を纏う。その光はや  
がて巨大な口のような形になり、それがイモータルソウルの延長の  
ように開く。

「ジュエルシードシリアル10……封印!」

『Sealing』

そして、群青の顎門が、ジュエルシードを噛み砕いた。

僅かに感じる痛みで、少年はゆっくりと起き上がった。周りを見ると、何故か町の至る所が壊れている。その光景に少しだけ恐怖を覚えると、近くで呻き声が聞こえた。見ると、そこには自分がひそかに想いを寄せている少女がゆっくりと眼を開けていた。

「だ、大丈夫？」

「……」

声を駆けるも、それが聞こえていなかったかのように少女は起き上がり、不安そうに辺りを見ながらその場を去るうとしてた。

「ま、待ってよ！」

急いで走り寄り、少女の肩を掴む。が、すぐに払われてしまう。啞然とし、その場に立ち尽くす少年。そんな少年に振り向き、少女は言う。

「……君、さつきからしつこいよ？ やめて欲しいんだけど」

冷たい声だった。少女の眼を見ると、そこには何の感情も抱いてい

ない。そこで、気づいた。今この少女は、自分に何の関心も抱いていないと。

凍りついたように動かない少年を前に、何事も無かったかのようにその場を去った。そして少年は……初恋が無残に打ち砕かれ、その場に座り込み、涙を流した。

「……」

そんな光景を建物の影で見ていた少年　　破乃宮　凶は、泣き崩れた少年を見て邪悪な笑みを浮かべて、ゆっくりとその場を去っていく。ふと前を見ると、なのはらしき人物が自分に向かって手を振っている。それに手を振り返し、ふと空を見る。そして、呟く。

「　　ああ、今日はいいい日だったなあ」

そして再び前を向き、晴れやかな笑顔を浮かべて歩き出した。

## 少年と少女と破壊の狂気（後書き）

……何だか、頑張る方向を間違えてる気がする。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5418s/>

---

過負荷な少年少女

2011年9月25日23時40分発行